

・ ・ ・ 其此、天下ニ疫病ヲコリテ人多死ケル。小女一人、此ノ危害ナクノガレタリ。(前同一〇二〜一〇三頁)

『地蔵菩薩応驗新記』上本第一話は、死に到る病が、地蔵像の方向に祈るだけで治る話である。

寛文二年加るに痢病を以てして殆將に起ざらんとす。・ ・ ・ 面を南方江州に向はしめ、端坐して掌を合せ、「南無一心頂礼大慈大悲地蔵大菩薩、本誓虚しからずんば、我が病をして速に消除せしめ給へ。若我必死に脱るることを得ば、一刀を作て慈恩に酬ひ、跬歩を企て尊容を拝し奉ん」と、至心に持念し祈願しければ、奇哉、それより漸に快爽覺て氣血日に加、数月ならずして完く復故せり。明年癸卯五月、長九寸五分の短刀を造て、浄信寺に往、本尊に拝謝し、これを奉納す。(二〇頁)

『地蔵菩薩応驗新記』上本第八話の一節は、第一節で引用した通り、地蔵像に祈り、疥癬が治る話だったが、生身の地蔵は登場しなかった。『地蔵菩薩応驗新記』中末第七話は、第一節で引用した通り、地蔵像に祈り、跡継ぎの女子を得る話だったが、生身の地蔵は登場しなかった。地蔵の現世利益的救済が、言わば、間接化していると云える。「間接化」の問題を別な角度から考えたい。第一節で引用した『延命地蔵菩薩経直談鈔』第六卷第三話は、夢に現れた生身の地蔵が、瘡の治し方を教えてくれる話だった。生身の地蔵が直接治してくれた話ではなかったのである。

「間接化」が顕著なのは、『地蔵菩薩一万躰印行縁起』(一八二二年序)である。同書は、序、計十三の説話及び印行の注意点十七カ条から成る。第一話の筋を紹介する。労咳を發症した旗本の夢に地蔵が現れ、印行を勧める。夢から覚めると、枕元に板木がある。この板木で地蔵像を一万体印行を行ったところ、病気が治ったという話である。第二〜十話は、おおよそ、この尊像を複写し、板木を作り、その板木(さらに複写した板木)で一万体印行を行うと、いずれも病氣等が治る、といった話である。即ち、夢ですら地蔵に会っていない。例外は、第十一〜十三話である。第十一話は、一旦餓鬼道に落ちそうになり、五六人の僧に救われるモチーフを含む。五六人の僧は、地蔵の化身であろう。第十二話は、海に財布を落とすが、老翁(地蔵の化身)により取り戻す話である。第十三話は、地獄に落ちるが、僧一人(地蔵の化身)によって、蘇生する話である。第十一・十三話は、蘇生譚であるが、第十二話は現世利益譚である。

『地蔵菩薩一万躰印行縁起』に於いて、第十二話という例外はあるが、生身の地蔵の出現なく、地蔵による現世利益を受ける話が大多数なのは事実である。

### 第三節 不公平な地蔵

現世利益に関して江戸時代的特徴をもう一つ述べる。それは地蔵が公平性に欠けた加担をする話が出てくることである。無論、古代・中世に於いても、地蔵を信ずる人しか救われないという観念は見られた。これに対し、江戸時代の地蔵説話集を見ると、古代・中世以上に、公平性に欠けた加担をする地蔵が見られる。

『三国因縁地蔵菩薩靈驗記』第八卷第十三話は、地蔵が水争いの一方に水を引く話である。

折節旱シテ、田ニ水ヲエガタクシテアレバ、水ヲ論ジテ喧嘩ニ及ビ、半死半生ニ打ナサレテ、・・・独言ニ、「サテモ心憂コトカナ。地蔵ヲ頼ミ奉ルホドニ、是ノ如クノ事ハヨモアラジトコソ思イシニ、何ノ利ニモナリ玉ハヌコトヨ」ト、恨ミ申シテゾ臥テゲリ。サレバ、彼ノ田ニ小僧一人立フサガリテ、水ヲ引玉イケリ。傍ノ人ノ云、「サノミ一方へ水ヲ引玉フベカラズ。先日由敷水論アリテ、大事ニ及キ。田主ニ雇レテ、案内ヲシリタマワデ水ヲ引玉フカ」トゾ申ケレバ、水ヲマカセヤミヌ。或人はヲ見テ、「余リニ此法師、水ヲ心ノママニ引ク悪サヨ」トテ、物ノ影ヨリ忍ヨリテ中指引ツメ射ニケル。小僧、矢ヲ射付ラレテ失ニケリ。・・・年来安置シタテマツル地蔵ヲ拜奉ケレバ、御足ニ土付玉イテ、御後ニ矢ヲ一筋負テ御座ス。（六九〇七〇頁）

地蔵がやや強引に水を引く話は、新潟県糸魚川市にも伝わる。

水引地蔵・・・広文寺地蔵をいう。毎晩、小僧の姿で寺領の田へ水を引入れた。百姓が怒って棒でなぐってその片腕を折ると、小僧は寺へ逃げ帰った。翌朝見ると地蔵の片腕がなくなっていたという。（『日本伝説名彙』四五九頁）

但し、広文寺は、現在不詳である。

『地蔵菩薩利益集』第二卷第十話は、大法師と化した生身の地蔵が実戦に参加する話である。

敵みかたがひに骨をくだくところに何ともなく大の法師一人。忽然とあらわれいで。鐵棒をもつてさんざんにたたなり。（前同二三丁表）

古代 中世に於いては、小僧と化した地蔵が矢を補給してくれ、結果、戦に勝つという話が存した。これに対し、江戸時代では、地蔵が実戦に参

加している点が異なる。なお、清水寺の勝軍地蔵は、夷征伐という大義名分であたが、当該話では、当地の平和という大義名分を打ち出している。

根来雑賀も羽柴秀吉公のためにうちうちおさめられて、日ごろの強毅もやみてければ、當国の人民いよいよ安堵のおもひをなし。ひとに大士の餘光なりとて感喜のひをかたりけり。(前同二四丁裏)

当該話は、『延命地蔵菩薩経直談鈔』に引用され、第三卷第六五話、また、天性寺の縁起として、説話にもなっている。『和泉名所図繪』には以下のようにある。

蛸地蔵 岸和田城下、天性寺にあり。「寺記」に曰、当寺の地蔵尊は、建武年中、蛸の背に御給ひて、海浜に出現し給ふ。其時節、逆乱なれば、人、敢て信敬せず。これを、城外の堀の中に棄にけり。天正年中、松浦氏、此城に籠られし時、紀州根来雑賀の逆徒、近隣を侵し、既に岸和田の城を陥さんとす。かかる時に、城中にひとり大法師あり。劍術妙手を震ひ、蝶鳥の如く戦ひければ、逆賊、大に恐れ、四度途になつてぞ敗走す。大法師、敵を追ちらし、忽然と見へず。人みな、奇とす。軍散じて後、城主、時々、蛸の掘に浮むを見る。これ奇怪也とて、多く人数を以て掘水を探らするに、木像の地蔵尊を得たり。於是、前に現じたる大法師は此地蔵の変身ならんと、初て信敬恭礼ある。なおも、諸人に拝胆させ、仏智の結縁あらしめんとて、当寺の住侶泰山和尚に授与し給ふ。因これによつて茲ここに安置し、世俗これを蛸地蔵と称す。(柳原書店版二七九頁)

蛸地蔵の話は、現在まで語り継がれている。

前述の如く、『延命地蔵菩薩直談鈔』第十一卷第二六話に於いて、地蔵は、盗人の便宜を図る存在だった。

このように、時に地蔵は不公平な利益をもたらす存在となつたのだが、これが悪戯する地蔵と繋がるのである。

\*『三国因縁地蔵菩薩靈驗記』は、榎本千賀・他編『一四卷本 地蔵菩薩靈驗記(下)』(二〇〇三年 三弥井書店)より引用。『地蔵菩薩利益集』は私架蔵本より引用。『延命地蔵菩薩経直談鈔』は、渡浩一編『延命地蔵菩薩経直談鈔』(一九八五年 勉誠社)より引用。『地蔵菩薩心験新記』は、『仏教説話集成「二」』(一九九八年 国書刊行会)より引用。『地蔵菩薩一万躰印行縁起』は私架蔵本を

使用。

「絵一」『新編日本絵巻物全集11』十八頁。真ん中よりやや左下に琵琶を持つ法師が描かれている。

No Image

1 『三因縁地蔵菩薩靈驗記』第四卷第十三話の一節・第五卷第十一話・第十三卷第四話の一節・『地蔵菩薩感応伝』下巻第四一話・『利益集』第三卷第六話・第八話・第四卷第四話・『直談鈔』第一卷第三三話・第五卷第五く九話・第七卷第四五話・第九卷第六六

話・第十一卷第二八話・『応驗新記』上末第三話・上末第十話・中本第五話・中末第五話・下本第四話・下本第八話・第九話・第十二話・下末第七話。

2 岩崎武夫『さんせう太夫』（前掲）九頁。なお、第二部第九章第二節で引用した通り、『子やす物語』にも、清水寺の地蔵が眼病治しの職能を有する記述があった。但し、眼病を治す話は記載されていない。

3 加藤康昭「近世村落共同体における盲人の存在形態」（『日本盲人社会史の研究』一九七四年 未来社）

4 無論、これで治らなかつた場合、共同体から離脱を余儀なくされた人もいたと考えられる。ジェラルド・グローマー『瞽女うた』（二〇一四年 岩波新書）。

5 水上勉『説経節を読む』（一九九九年 新潮社）一〇頁。

6 兵藤裕己「琵琶法師・市・時衆」（武田佐知子編『一遍聖絵を読み解く』一九九九年 吉川弘文館）。

7 兵藤裕己『琵琶法師』（二〇〇九年 岩波新書）七三頁。

8 竹村俊則『新版 京のお地蔵さん』（前掲）三四〜三五頁

9 「岸和田のむかし話」編集委員会『岸和田のむかし話』（一九九二年 岸和田市）三〇〜四〇頁。

## 第六章 罰を下す地蔵・悪さをする地蔵

### 第一節 罰を下す地蔵

第五章では、江戸時代になると、生身の地蔵に会う必要が無くなってきたことを述べた。その一方、地蔵像を破壊すると、罰が下るといふ話が散見するようになる。

まず確認しておくと、地蔵像を破壊すると、地蔵が罰が下すという話は中世では稀である。第二部第二章冒頭で引用した通り、無住『沙石集』には地蔵像を破壊する話（第一巻第十話）を含むが、結果罰が下るといふ筋ではなかった。但し、同じく無住『雑談集』には、生身の地蔵を破壊しようとし、罰を受ける話がある。しかし、「ヲノズカラ」とあり、地蔵が罰を下す話ではない。

無道心ノ不信ノ者ニテ、「コノ地蔵ノ所詮ナク、朝アルキシ給テ、サムキニ祖父ヲヲコシ給フ」ト恨ミ、「アハ地蔵ヨ」ト思テ、能々捕へ奉テ、打ントシケルホドニ、隣ノ人食犬ナリケリ。死々ヤミシタリケリ。心ワロケレバ、ヲノズカラ、罰ヲ被ルナラヒナリ。（第六巻第一話・中世の文学『雑談集』一九四頁）

桂川地蔵事件（一一四一七年）では、やらせではあるが、人々は地蔵の現罰を信じていた。

西岡男心狂乱シテ。彼石地蔵ヲ切突ケルホトニ。忽腰居テ物狂ニ成ケリ。近辺物共集テ見之。地蔵之御罰新ナル事ヲ貴ミケリ。（『看聞日記』前同三〇頁）

但し、当該の地蔵像は生身と信じられていたものだった。仏教では、仏身を傷つけ、出血させると、五逆罪となる。五逆罪を侵すと地獄に落ちるとされる。『雑談集』や桂川地蔵事件では、生身の地蔵を破壊した（しようとした）ため、罪を受けたのである。

これに対し、江戸時代になると、地蔵像を破壊することによって、罰が下るといふ話が多数見られる。その先駆けなのが、『三国因縁地蔵菩薩靈驗記』（二六八四年刊）である。同書では、地蔵が直接罰を下すのではなく、神が罰を下すという論理を取っている。

其夜ノ夢ニ、僧一人来リ玉イテ翁ニ向テ言、「……吾ハ此寺ノ六地蔵ナリ。……彼ノ朝臣シキリニ不信ノ咎重クシテ、濟度スルニアタハズ。故ニ、天怒ヲ為テ、雨ヲ下降ス。竜神罰ヲアタヘテ、浪ヲ起ス。……」（第八巻第十一話・前同下巻六四頁）  
暁スコシ睡ル夢ニ、兒儀端正ノ僧ノ、香ノ衣ヲ著テ杖ヲツキ、師親ニ向テノ玉ハク、「……我平等ノ心ヲ以テ助ケントスレドモ、

賞罰善神等ハ大ニ怒ヲ成、イヨイヨコレヲ戒、或トキハ罰神ト現ジ、悪風・猛火トナリテ、中天ヲアタヘテコレヲ罰ス。(第十二卷第二話・前同下卷二三六頁)

沙門ノ云、「当代ノ衆生モ是ノ如シ。作業一ツニツヲ作トキハ、仏ノ憐愍ノ御目ニハ見許シ育玉ヘトモ、罪業重畳スレバ、輪廻ノ業ヲ哀ミテ、彼衆生ヲ舍玉フ。此時、天神・地祇モ当伐ト成テ、冥罰ヲアタヘ玉フ者也。……」ト。(第十二卷第三話・前同下卷二四一頁)

但し、全編を通して、この論理が一環しているのではない。第五卷第八話は、生身の地蔵を切りつけた結果、五逆罪となり、亡くなってしまう話である。

七尺許モアラントオボシキ大ノ法師、杖ヲ持テ彼男ニ向、眼ヲ怒シテ、「狼藉ナリ、其ノ処立出ヨ」ト制ス。七郎打笑、「イラヌ僧ノ教化ダテ」ト飛テカカリテ、……下ヨリ三刀指シテハネカヘシテ、ニゲサリス。明日風聞シケルハ、「何狂人ナレバ、本尊ヲ是ノ如ク庭ニ下シ、木仏ヲカヤウニ刀目ヲ入シ事ゾ」ト、貴賤門前ニ市ヲナシ、「此者ノ果報イカバカリノ事ナラン、誠ニ出仏身血ノ大罪人哉」トゾ申合リ。七郎怪思ヒ往テ見レバ、疑無ク所作ナリ。身ノ毛ヨダチテ、其ノ儘立去ヌ。其後彼男、万事不如意ノ義ノミアリテ、剩重病ヲ受テ相果ヌ。(前同上卷二五九頁)

第六卷第十八話は、地蔵像に火印を押した女が冥土に落ち、地蔵に救済される話だが、落ちた理由は明言されていない。

然ル所ニ彼女、俄ニ病ヲウケテ息絶ヌルトキニ、……琰王ノ庁ト申ス所ニ行スヘタリ。冥官達、「アレハ地蔵ニ火印シ奉ル女カ」トササヤキノシリテ、……(前同上卷三六二〜三六三頁)

第七卷第五話は、地蔵を刻んだ卒塔婆を橋にした男が冥土に落ちる話だが、この話に於いて冥土に落ちる理由は「仏体ヲ橋トシ、尊像ヲ足ニ踏等」が地獄に墮ちる罪に該当するからとされる。第十卷第五話は、前掲の、『雑談集』第六卷第一話の一節を含むが、罰を受ける理由を「ヲノズカラ」とする点は同一である。

『地蔵菩薩利生記』(一六八八年刊)になると、地蔵像を破壊すると、現世で罰を受けることが明言される。但し、依然、地蔵による罰というより、五逆罪の一つという位置付けである。

第五 太秦村の地蔵の形像を斬て報をえし事

……かの尊像の結跏趺坐し玉へる。下の方を六七寸曳切奉りて。……この大工程なく煩付て。腰のあたり。みな腐て。死にけり。……論じて云。佛身より。血を出をもつて五逆罪の随一とす。然れども今肉身の仏在ざれば。此科を侵ものなかるべし。但し俱舍論に。五逆の同類をあくるに。卒塔婆を破壊するをもつて。無間の業とし。本願経には。三寶を毀謗し。尊経を敬ざるをもつて。阿鼻の罪とす。いかに況や形像を破壊するをや。(第五卷第五話・前同二二丁表〜二三丁裏)

『地蔵菩薩利益集』(一六九一年刊)だと、地蔵像を破壊すると、現報を受けるといふ位置付けになる。

石地蔵を鐵炮にて打忽現報をうけし事  
手ずさみとして。鉄炮をもつてこの石地蔵を打ちこわしかば。あたりぬとおぼして手ごたしける。即時に自迷悶して。やがて絶入しけり。

(第二卷第十二話 前同二八丁表〜裏)

『礦石集』(一六九二年刊)になると、地蔵の罰が明言されるようになる。

大坂玉造石地蔵ノ事

近比其近處ノ女人。内布ヲ浣濯テ覺ズ。彼ノ石地蔵ノ上ニ挂テ晒ケリ。其夜ヨリ彼女狂シテ只バシリ。……正シク地蔵尊ノ罰ナラントテ。……小兒彼ノ邊ニ溺リセシカバ。謬テ地蔵尊ニ进リカカリケリ。即時ニ彼ノ兒ガ肌葩太ニ腫テ痛ミケリ。此モ地蔵尊ノ罰ナリト云。第一卷前同その一・五五頁

『延命地蔵菩薩経直談鈔』(一六九七年刊)でも地蔵の罰が明言される。

彼地蔵 鎌打立タル人ホドナク吾胸ニ腫物イテキ甚ヨリ膿血日夜ナガレ百只ハカリヌテ終ニ死去セリ此人ヲ存シタルモノ地蔵ノ御罰ト云ヒ  
弥ヨ彼地蔵ヲ信仰ヘ第三卷十九話 勉誠社版二四五頁

彼者此石地蔵ヲ右ノ足ニテ踏倒シ其尊像 小便ヲシカケ還ルニ其踏タル足忽チ腫テ太ニ痛ミ終ニ延スシテ脚トナリサテ其夜ヨリ男根痛ミ出  
デ太ニ腫漸漸ト腐テ遂ニ落タリ。予ガ眼前ニ見タル地蔵ノ罰ナリ第三卷第五話 前同二八八頁  
洛南善想寺延命地蔵罰を蒙り信者と成る縁

彼宗哲放逸シテ菩薩一不奉公ノ故ニヤ・・・彼僧始メ何者ヤラ錫杖ヲ以テヒタモノ我ヲツクト云ツテ喚リ哭ビケルガ後ハ直ニ地藏来リ少シノ間モ寝セズ第五卷第三九話 四三三頁

第五卷第三九話は、生身の地藏が直接罰を与えている点が特徴的である。

洛陽大雲院中麦入地藏罰を蒙リ信者と成る縁

彼ノ寺ノ僕地藏尊ニ備ヘタル菓子ヲ少シ盗シカバ忽チ狂気シテ寺内寺外ヲカケハシリ・・・自云ク諸佛菩薩ノ中ニ地藏薩埵コソ罰利生新タナリトテ（第五卷第四一話・前同四三四〜四三五頁）

『地藏菩薩応驗新記』（一七〇四年刊）上本第六話・中末第六話では現罰とある。

往來の妨なればこそ、引起して傍なる溝中へ抛擲し、山へ躋て草を刈り、馬に負て打騎 村歌して帰けるが、彼尊の前にて俄に此馬蹕躍し、縦横に駆廻りて駐らず、終に倒に落て頭を打碎 脳血に塗て忽ち死にけり。・・・古今毀破三宝の輩 かかる現罰を受ること、見聞の普く知る所なれども・・・（上本第六話 前同二七頁）

石像に戲謔し、「御坊と相撲が望み也」とて、種々撫弄狎玩しけるが、翌日より重病に罹り、医師診察するに其病症に名る者なく、療治するに及で更に効驗なかりければ、必定先に地藏尊を軽蔑せし現罰ならんと自讎し自悔し、遙に香灯を献じて至心に帰命しければ、さしもの重病速に平愈しけり。（中末第六話 前同六三頁）

同上末第四話では、生身の地藏が直接、盗人を懲らしめる話である。

尊前に備し鏡餅のいみじく大なる盗取て負去んとしたりしに、端正の雛僧忽然と出給ひて、「汝に餅を負得させん」と有しかば、甚平衛用意して持行たる索なはを出してわたしければ、雛僧かひかひしく其もちいを括負せ送出し給ひけり。・・・背上に負ぬる餅の可笑しとして絶倒しけるが、疑ふ所もなく此大士の餅盗人を懲しめ給ふなりとて、（三五頁）

同中本第六話では「不敬の罪」による「仏罰」とある。

尊像を嘲弄して曰「面目耳鼻も其と見えぬ浅間嶽の焦石の欠塊を、誰が地藏とは名しぞ。谷底蹴落ふといふ。同列これを制止す。伊藤笑て曰「直饒たしひ仏にもせよ、我等は爾前小乗の仏は敬するに足たずと謂つつ、一踏に踏落す。小堀氏これを聞て、「且は他国といひ、且は仏像

也。汝が不敬の罪、争か遁得んと、呵責して過……右の脚大に腫疼、大熱煩悶して昼夜悩逼す。小堀氏せめ語て曰、「先に言はずや。是必仏罰也。早く懺悔禱謝せよ……」と……彼石像を谷底より担出し、本座に安置しければ、奇哉。伊藤が疾苦、洗滌がごとく平痊しけり。

(前同五二頁)

同中本第八話では「罰」「罪報」「御祟」「現報」とある。なお、二条の話からなる。

加州金沢卯辰山の石地藏に礫うちて罰を蒙し事

礫を擲かけかけしければ、其礫錯て石像の左の耳輪を打欠けり……其夜俄に寒熱交戦ひ、耳痛、喉塞、顛狂譫語して曰、「汝我が耳を損傷す。罪報苟も脱がるゑからざと……さてこそ此御祟なりと懼て、石灰に漆液を和調して欠所を修補し、香花を捧、懺悔投謝して帰りければ、さしもの奇病即時に本復せり……後藤童、大なる石を擲着ければ、御首は地にぞ墮にける……後藤、其七つとき晡より大熱堪がたく、「頸の骨が折るゑ」と号泣……父大に驚怖れて、翌朝石工に命じて、彼御首を本の如く継奉り……熱も退、頭の痛も漸に除けり。尋で瘡疾となりて、医療すれども治せず……彼尊前に詣て容顔を子細によく瞻たてまつれば、我子の腫痛の所毀欠して在しければ、必定此現報と思ひて、牢実く補飾し奉り、其罪愆を恕有し給と敬心懺悔して帰けるに、毒腫速に瘳く、聊其痕も見えざりけり。此事を見聞して、後藤がごとく罰あたるなど誠て、童子ども却て帰敬の念を勧発し、諸人渴仰の心を増進にけるとぞ。(前同五三〜五四頁)

前半の話は、地藏が主人公に憑依して原因を述べている。

## 第二節 悪さをする地藏

これと並行して、地藏像が生身となって現れ、悪さをするという話が出てくる。その先駆けとして、浅井了意『東海道名所記』(一六六一年刊)に記す、大磯切り通しの石地藏が挙げられる。

切通あり。右のかたに、石地藏あり。そのかみ、この地藏、夜ごとにばけて。往来の人を、たぶらかし、なやましけり。紀州のなにかしとかや。いそぎたる道なりければ。夜に入て、ここをとをり侍べりしに。うつくしく女になりて。立出つつ、とかくするほぼに。しきりに、おそろしくなりければ、ぬきついに打ちけり。きられてのちに、あらハれたり。立よりてミれば。石地藏のくび、

うちおとされたるにてぞ有ける。それよりこのかたハ、くびきれの地蔵とぞ名付ける。(東洋文庫版一一〇頁)

この話では、地蔵は旅行く人を驚かす程度の悪戯しかしていない。なお、首を切られたからといって、地蔵が祟った訳でもない。『諸仏感応見好書』(一七二六年刊)では、地蔵が在家の男となつて、女の茵に入り、成敗を受ける話がある。

武州野島の浄珊寺の本尊地蔵尊は、靈驗多し。其の一二を語ば、或とき男と變じて、在家に下り、女の寢所に入り、夫婦に成んと曰て、或は咄て下よと曰ふ。男女論ずるに不審晴難し。夜、待ち受て、棒を以て叩くこと数杖す。(原漢文・前同七九頁)

『想山著聞集』(一八四九年成立)では「夜ばひ地蔵」の話を載せる。

又、武州入間郡富村ハ江戸より十里餘西なりVの地蔵尊も靈驗新たにして、遠近、歩みを歩ぶ所也。此地蔵尊の事を、土俗、富の夜ばひ地蔵と云て、其名高し。予、此事を其村の長たるものに聞試るに、夜ばひじひをなさるる故と申事に御座候と答ふ。夜ばひとは如何なしと給ふにやと問ふに、若き女、よき娘など有所へ御出なされ、徒いたづらをなさると申ことに御座候と云り。(『日本庶民生活史料集成 第十六卷』四九頁)

採録時代は下るが、岩手県遠野でも、地蔵が夜這いをする話が伝わっていたという。

遠野郷での話で石地蔵が夜々近所の娘に夜這ひはねつけられたといふ話を聞いたことがある。(佐々木喜善『農民俚譚』一九三四年刊、日本民俗選集版六〇頁)

採録地が遠野で、採録者は佐々木喜善(一八八六〜一九三三)であることを考えると、かなり古くまで遡れる可能性を有した話である。

さらに、生身の地蔵が、お金をごまかすという伝承も生まれてくる。

小石川戸崎町喜蓮寺の地蔵は、婦人血の道、子供の腫物に御利益があると云ふので、これまた有名である。今より約二百二十年も前の話だが、喜蓮寺の門前に嘉兵衛と云ふ豆腐屋があつた。この豆腐屋へ毎晩の様に、九つ位の小坊主が小さな岡持を提げて、豆腐を買いにやつて来る。店を終つてから、賣溜の金を勘定して見ると、小坊主の来る時に限り小石が混じつてゐる。……或る夜いつもの如く、小坊主が豆腐買いにやつて来た。錢を置いて、豆腐を同時に入れて帰る所を嘉兵衛は跡を付け、豆腐切りの包丁で、小坊主の肩先めかけて切付けたのである。……嘉兵衛は氣味惡るげに、點々零れてゐる血の跡を付けて行くと、それが喜蓮寺境内の地蔵堂の前で止まてい

る。嘉兵衛はテツキリ狐か狸の仕業と考、…寺男が堂の中の地蔵様を見てビツクリして「地蔵様がやられた。肩先から血を流れて御座る。…。」と叫んだ。…さては地蔵様が小坊主に化けて豆腐買に來たのであつたか、勿體ないことをしたと、嘉兵衛は恐入つて、地蔵様に謝た。(佐藤隆三『江戸の口碑と伝説 一九三一年刊 日本民俗選集版八一〜八二頁])

これも活字化は一九三一年だが、題名から分かる通り、江戸時代の江戸の伝説を文献や聞き取りによって、記録化したものであるゆえ、江戸時代に遡れる可能性を有している。

これまで見てきた通り、江戸時代になると、一方に加担した現世利益を与える地蔵や罰を与える地蔵という観念が明確化してくる。この観念によって、一部には悪戯する地蔵という話が生まれてきたと云えるのである。なお、この悪戯する地蔵は一種の「化け物」であるが、地蔵は生身で現れるという観念を前提としている。なぜなら、化け物(今で言う妖怪)は、幽霊と同じく、人に対して「悪さ」を行う存在であり、幽霊と異なり、生きている存在であるからである。

今一度確認すれば、地蔵は仏教の菩薩である。にもかかわらず、江戸時代に於いては、時に悪戯をする存在となったのである。

\*『雑談集』は三弥井書店・中世の文学『雑談集』より引用。『看聞日記』は『続群書類従補遺 第三卷』より引用。『三国因縁地蔵菩薩靈驗記』は、榎本千賀・他編『一四卷本 地蔵菩薩靈驗記(上)(下)』(二〇〇二〜〇三年 三弥井書店)より引用。『地蔵菩薩利生記』・『地蔵菩薩利益集』は私架蔵本より引用。『礦石集』は、関口静雄・寺津麻里絵「惟宝蓮体『真言礦石集』翻刻と解題」(『学苑』第八六四号 二〇一二年)より引用。『延命地蔵菩薩直談鈔』は、渡浩一編『延命地蔵菩薩直談鈔』(一九八五年 勉誠社)より引用。『地蔵菩薩応驗新記』は、西田耕三校訂『仏教説話集成二二』(一九九八年 国書刊行会)より引用。『農民俚譚』・『江戸の口碑と伝説』は、小川直之編『日本民俗選集 第12卷』(二〇〇九年 クレス出版)より引用。

1 但し、仏像を破壊して罰を受ける話が、中世以前に皆無という訳ではない。『日本靈異記』下巻第二九話は、童子が戯れに作った仏

像を破壊した男が、悪死している（日本古典文学大系『日本霊異記』四〇五頁）。

2 この話に於いては、豆腐屋に不備はなく、一方的に地藏が悪戯する筋になっている。現代に於いては、概して豆腐地藏の話は、改作され、豆腐屋が質の悪い豆腐を売り、金儲けをし、地藏が諫めたという筋になっていることが多い。例えば、日本児童文学者協会編『東京都の民話』（一九八〇年 偕成社）では、喜蓮寺近くの豆腐屋が質の悪い豆腐を売ったという筋になっている（四六～五四頁）。『江戸・東京 歴史の散歩道2』（二〇一二年 街と暮らし社）でも、東京都新宿区若葉・東福院近くの豆腐屋が質の悪い豆腐を売ったという筋になっている（一四一頁）。

3 田中貴子は、妖怪・豆腐小僧の前身に、豆腐地藏を想定している。田中貴子「豆腐小僧の謎を解く」（日本宗教文化史学会二〇〇五年四月大会口頭発表）。

4 諏訪春雄「幽霊・妖怪の凶像学」（小松和彦編『日本妖怪学大全』二〇〇三年 小学館）。

#### 第四部 明治時代から現代までの地蔵信仰

江戸時代に至っても、地蔵の、死者供養の職能は残っており、時に非業の死者を供養する職能が存した。また、中世を継承して、現世利益の職能を有していたこと、しかしながら中世と異なり、生身の地蔵に会う必要はなくなったこと、しかしながら生身の地蔵という観念は残存していたことを第三部に於いて論じた。第四部では、これらの事柄が明治時代以降、どう継承され、あるいは変化したのか、ということ論ずるのが第四部である。

明治時代になって、まず生じたのは、廃仏毀釈であった。廃仏毀釈は、明治政府の出した、神仏分離令（一八六八年）に端を発した、仏教排斥運動である。但し、全国均一ではなく、国学者の強い地域に顕著であったとされる。これによって、路傍の地蔵像が破壊されることもあった。廃仏毀釈は、明治政府が教導職といった形で仏教を取り入れようとしたこともあって、一八八〇年頃には下火になる。地蔵信仰に影響を与えたのは事実であるが、長期的なものではなかった。

明治政府の政策で地蔵信仰のあり方に長期的影響を与えたのは、地租改正である。これにより、原則、誰の土地でも無い場所は無くなった。ゆえに、江戸時代と異なり、路傍に地蔵像を立てることは難しくなった。明治時代以降に立てられた地蔵像は、一見、路傍にあるように見えるが、調べてみると、当地は私有地と判明することが多い。さらに、戦後、日本国憲法によって、政教分離が規定され、路傍等の公有地に地蔵像を立てるのは困難になった。

思想面で云うと、廃仏毀釈・檀家制の廃止によって、仏教界は、これまでの迷信を捨て、仏教教学に専念するようになった。この延長上にあるのが、井上圓了の、妖怪撲滅運動である。この傾向は、戦後も続いている。

こうした情勢の中、地蔵信仰は、どう継承されたのか、どこが変化したのかを、第四部では項目を絞って分析する。

## 第一章 後生善処の職能

### 第一節 非業の死者を供養する職能

江戸時代に於いて、地蔵は活躍の場を現世に移しつつあったが、死者供養の職能が消滅した訳ではなかった。就中、夭死者等非業の死者を供養する職能を有していた。明治時代以降、死者供養の職能はどうなったのか？ 結論から云うと、非業の死者を供養し、後生善処へ引導する職能を依然有していた。三吉朋十『武蔵野の地蔵尊 都内編』（前掲）によって、東京都域の事例を以下紹介する。新宿区西新宿八・成子坂の子育地蔵は、一八九二年（明治二五）造立である。由来は以下の通りである。

むかしは、この辺は街道すじであつたといひながら、人の往来は少なく、おりおり追剥ぎや盗賊の類などが出沒して害を被るものもいた。

坂の彼方のある家に奉公する男がいたが、たまたま暇をもらつて故郷に帰ろうとして、この坂下まで来たとき、横道から忽然と追剥ぎが現れ、この男を殺して財布をうばつて逃げた。あとからわかつたことであるが、殺されたのは実はわが子であつた。追剥ぎは、わが子であるとはつゆ知らずして殺してしまつたのである。

父の驚きは言語に絶し、いくら悔いても死んだ子は帰り来ない。ただちに一体の地蔵尊を造つて、父は堂守となつて一生を終わつたという。（一三三頁）

北区岩淵三二・正光寺（浄土宗）にある、鎮台戦没者供養地蔵は、日清戦争（一八九四〜九五年）で戦死した軍人を供養する目的で一八九六年に立てられたものである<sup>1</sup>。この頃は、まだ靖国神社に対する意識が薄かつたと考えられる。戦死し、靖国に祀られた軍人が英霊とされるようになったのは、日露戦争（一九〇四〜〇五年）以降であり<sup>2</sup>、また、靖国神社が他の官幣社に対して優位性を有するのも日露戦争以降である<sup>3</sup>。さらに全国的に招魂社創建の動きが活発になるのも、日露戦争後以降である<sup>4</sup>。

港区青山二・青山墓地にある十体地蔵（一九一〇年造立）には以下の銘文が記されている。

茂 壮年の頃 血氣定まらず。非道に淫を行じて孝順心に背き、五人の婦女をして九児を流産せしむ。今老境に及んでこれを憾む

ここに参禅会に投じて懺悔滅罪して地蔵願主の像を建立して亡児の菩提を資助するものなり。願主浜野茂五十九 時明治庚戌七月 可

睡黙仙書（前同一八二頁）

台東区谷中五―八・観音寺（真言宗）にある、六面塔五地藏（一九一七年頃造立）には以下の話が伝わる。

大正六年のころ、この寺の付近に住んで教鞭を執る某がいた。某は発狂してそこに居合った妻子五人を殺害し、自分もまた自害してしまった。・・・近隣の人達は惨殺された五人の菩提を哀れみ、この六面塔を造立した。（前同七三頁）

こうした、非業の死者を供養する職能は、戦後にも継承される。代表的な例としては、東京空襲の死者供養である。板橋区大山金井町の地藏陽刻の石塔は、一九四五年、東京空襲によって亡くなった九名を供養するために立てられた。大田区矢口渡の放光地藏も、東京空襲の死者を供養するために立てられたものである〔写真一・二〕。

なお、非業の死の一種である、夭死者供養の職能も依然、存した。周知の通り、一九六三年、当時、四歳の村越吉展は、誘拐犯に惨殺された。この死を供養するために立てられたのが、吉展地藏である。吉展地藏は二箇所にある。荒川区南千住・回向院（浄土宗）に、東京母の会連合会等が発起人となったものと、遺骨発見場所である円通寺（曹洞宗）に立てられたもの二体である。品川区南品川・海徳寺（日蓮宗）にある、ホームラン地藏は、一九六二年、心臓病で亡くなった少年を供養する地藏である。「ホームラン」という苗字は、生前、少年が、王貞治と交流があったためである。一九六二年は、王貞治が始めてホームラン王になった年でもある。

## 第二節 水子地藏の発生

地藏の、非業の死者を供養する職能により、一九七〇年代以降、水子を供養するために、水子地藏が各地に造られる。この場合の水子は、「胎児。特に、流産または墮胎した胎児」（『大辞泉』一九九五年）の意である。墮胎は江戸時代には行われていたことが確認される。墮胎の近代的形態である、妊娠中絶は、第二次世界大戦以降、優生保護法により実質、合法化されたため、急増した。

墮胎によって亡くなった胎児を供養する風習は、江戸時代にも存する。例えば、松平定信が両国・回向院に造立した水子塚は、「墮胎死胎夭殤」者を供養する目的であった。（従って、この場合の「水子」は夭死者を含む。以下、「水子」はこの意。）しかしながら、江戸時代の「水子」供養と一九七〇年代以降の水子供養とは大きな違いが存する。それは江戸時代の「水子」は賽の河原で鬼にいじ

められる弱々しい存在であったに対し、一九七〇年代以降の水子は、両親に崇る、強い力を持った存在である<sup>10</sup>。一九七〇年代以降の水子供養に於いては、戒名を付ける等大人並みの供養が行われている。江戸時代に於いて「水子」は、まだ大人になっていない存在と認識され、それゆえ、供養に於いては戒名が付けられず、生まれ変わりが期待される存在だった。であれば、一九七〇年代に大人並みの供養を行うという意の水子供養が発生した理由も明白である。妊娠中絶が盛んであった訳ではない。件数だけであれば、減少期である。一九六〇年代以降、自宅出産が減り、病院出産が一般化していった。産婦人科病院で、超音波検査が一般化していった。産婦人科病院で検査を受ければ、胎児の姿がおぼろげながら分かる。それ以前は、胎内に居るといふ神秘的な存在であったに対し、超音波検査によって、「人」と見なされるようになったのである<sup>11</sup>。であれば、胎児の死は非業の死であり、亡くなった胎児は崇る存在と見なされるようになったのである。

以上の如くの、現代的水子供養は依頼者の要請によってのみ始まった訳ではない。森栗茂一は、拝み屋といった女性の相談を受ける霊能者が、水子物語の創作の一旦を担っていたことを指摘している<sup>12</sup>。即ち、相談者の、「最近体調が悪い。水子のせいではないか？」といった相談を受け、解決の道を探る中から水子物語が創作されていったことであろう。森栗が紹介する占い師は、| 占い師本人の弁によれば | 一九六〇年代後半から水子の相談を受け、水子供養を行っていた<sup>13</sup>。一九六〇年代後半であれば、水子供養の早期の事例となる<sup>14</sup>。なお、この問題を考えるに、「昨今は（註 | 一九九五年頃）、動物霊の憑依が減少する一方で、水子の霊が顕在化する現象が増幅しつつある」<sup>15</sup>という石川純一郎の指摘も重要である。都市化された現代社会に於いて、体の不調の原因を動物霊の憑依とすることは説得力を持たない<sup>16</sup>。一方、水子霊は、前述の胎児を「人」と見なす觀念の定着によって、説得力を持つのである。

話を地蔵に戻す。一九七〇年代に発生した、現代的水子供養に於いて、地蔵像を造立する理由は、地蔵の、非業の死を供養する職能に由る。以前と違って、胎児の死は非業の死であり、崇る死となった。非業の死であれば、地蔵が関与するのは当然である。また、江戸時代に於ける、地蔵の、天死者供養の職能が現代に於いて忘れ去られていた訳でもない。のぞきからくりの「地獄極楽」（賽の河原の場面を含む）は一九五五年頃まで行われていた<sup>17</sup>。

水子地蔵という名称の初出は、一九七〇年に造立された、京都・化野念仏寺のもの<sup>18</sup>とされる。水子地蔵像造立は依頼者から発願と

される<sup>19</sup>。翌一九七一年、埼玉県秩父・水子地藏寺が建立される。これは水子供養専門の寺である。同寺に於いては、水子供養に於いて、小型の水子地藏像を奉納することが求められる。住職・橋本徹馬<sup>20</sup>が著した『水子地藏寺霊験集』（一九七三年 紫雲荘）によって、水子の崇りの恐怖<sup>21</sup>と、水子供養の必要性が世の中に認知されるようになった。同書は、手紙による相談に答えるという形を取って、水子供養の大切さを訴えている。同様の著作としては、中岡俊哉『愛ーもし生まれていたら』（一九八〇年 二見書房）・三浦道明『愛ーもし生まれていたら』（一九八一年 文化創出版）等が挙げられる。中岡は一九七〇年代の心霊写真ブームの仕掛け人である<sup>22</sup>。三浦は、水子供養を推進した滋賀県三井寺円満院の住職である。これらの本及び中岡や三浦を紹介する雑誌記事によって、水子供養は普及していった。

以上の如く、水子供養は、宗教者（含む…霊能者）がビジネスとして推進した面が強い<sup>23</sup>。しかしながら、水子供養に於いて、地藏像造立を伴うことを多くの人が受容したことも事実なのである。現代に於いても、非業の死の供養は、地藏が担うものなのである。

但し、これまで何度か指摘してきた通り、日蓮宗寺院では水子観音が造立されることが多い<sup>24</sup>。観音の、死者供養の機能が消滅してしまっただ訳ではない。



「写真二」東京都大田区矢口渡在の放光地藏尊。二〇一五年三月撮影。

「写真二」放光地藏尊の説明版。二〇一五年三月撮影。



- 1 三吉朋十『武蔵野の地藏尊 都内編』（前掲）五七頁。
- 2 村上重良『慰霊と招魂』（一九七四年 岩波新書）一五二頁。
- 3 村上重良『慰霊と招魂』（前掲）一四八頁。
- 4 今井昭彦『近代日本と戦死者祭祀』（二〇〇五年 東洋書林）二二三頁。

- 5 三吉朋十『武蔵野の地蔵尊 都内編』（前掲）三七〇～三八頁・安置場所は、一見路傍に見えるが、私有地。
- 6 品川区教育委員会『しながわの史跡めぐり』（一九九七年）二七頁。
- 7 宮田登「水子霊」の復活」（『心なおし』はなぜはやる』一九九三年 小学館）。
- 8 「実質」としたのは、刑法の堕胎罪規定が廃止されていないからである。
- 9 大森志郎「間引・縁女・水子塚」（『東京女子大学論集』第三卷第二号 一九五三年）。
- 10 森栗茂一『不思議谷の子供たち』（一九九五年 新人物往来社）八五～八六頁・Helen Hardacre"Marketing the Menacing Fetus in Japan" 1997 California U.P. pp.86-89
- 11 鈴木由利子「水子供養にみる生命観の変遷」（『女性と経験』第三四号 二〇〇九年）。
- 12 森栗茂一『不思議谷の子どもたち』（前掲）一七六頁。
- 13 森栗茂一「水子供養の発生と現状」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第五七集 一九九四年）。
- 14 東京都港区芝・増上寺では、一九五四年には既に水子供養が行われている。「水子供養」（『助産婦雑誌』第六卷第五号 一九五四年）。但し、水子が現代的意味（＝主に中絶胎児）かどうかは定かではない。また、文章を読む限り、個別に戒名を与えるといったものでもない。
- 15 石川純一郎『地蔵の世界』（前掲）三六頁。
- 16 若干話は外れるが、内山節によると、日本人がキツネにだまされなくなったのは、一九六五年頃とされる。『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』（二〇〇七年 講談社現代新書）
- 17 板垣俊一『江戸期視覚文化の創造と歴史的展開』（前掲）一二二頁。のぞきからくりには「地獄極楽」の絵解きは不可欠であった。関山和夫『話芸の系譜』（一九七三年 創元社）三九頁。
- 18 森栗茂一『不思議谷の子供たち』（前掲）一〇八頁。鈴木由利子は、一九六一年、鳴子熱帯植物園に水子地蔵が造立されたとする。「水子供養にみる生命観の変遷」（前掲）。しかし、私が二〇〇〇年に現地調査に赴いたところ、「一九六一年」を裏付けるものは無

かった。清水邦彦「水子地蔵の起源を求めて」（『宗教研究』第三二七号 二〇〇一年）。

19 あだし野念仏寺『愚沙』（一九七八年）一三七〜一四二頁。

20 元・政治家。一九四〇年、近衛文麿の密命を受け、渡米し、日米和平交渉を行ったとされる（須藤眞志「日米交渉にみる民間人外交の限界」『日米開戦外交の研究』一九八六年 慶應通信）。水子地蔵寺落慶式に当時の佐藤栄作首相が列席しているので、戦後に於いても政治家との関わりはあったようである。

21 この点が、所謂女性解放運動から非難されることとなる。また、志水和夫は、水子地蔵寺開創以前、橋本が水子の崇りを否定していたことから橋本の手口を批判している。『大予言の嘘』（一九九一年 データハウス）三六〜三七頁。志水の論拠は、橋本鉄馬『信仰百話』（一九六七年 紫雲荘）五六〜五七頁だが、ここに於いても橋本は水子の崇りを全否定している訳ではない。

22 板倉義之「（霊は清かに見えねども―中岡俊哉の心霊写真という常識）」（『柳広孝編『オカルトの帝国』二〇〇六年 青弓社）・板倉の、一九七〇年代まで、中岡が心霊写真の崇りを主張していなかったとする点は、註21の志水の指摘と合わせて、水子霊の崇りの発生を考える重要な問題を提起している。

23 森栗茂一『不思議谷の子供たち』（前掲）二四頁。

24 序章註9参照。

## 第二章 とげぬき地蔵信仰

### 第一節 江戸時代～第二次世界大戦

地蔵の、死者供養の職能が、現代まで残っていることを第一章で確認した。では、明治時代以降、現世利益の職能はどうだろうか？ 明治政府及び明治時代の仏教は、迷信に否定的であったが、だからといって、例えば、民衆が地蔵の御符の利益を否定した訳ではない。このことは、現代の地蔵信仰の代表例である、東京都豊島区・とげぬき地蔵の歴史と現状を分析することで判明する。とげぬき地蔵は通称で、高岩寺という曹洞宗寺院の本尊<sup>1</sup>である延命地蔵尊<sup>2</sup>（秘仏）である。

とげぬき地蔵を取り上げる理由は、縁日である毎月の四日・十四日・二十四日及び土曜・日曜には、東京のみならず、近県から<sup>3</sup>もお年寄り（特に女性）が押し寄せ、「おばあちゃん原宿」と呼ばれているからである。その功德は病氣治しである。地蔵の縁日と云えば、『地蔵菩薩応驗記』以来、二四日であるが、4の付く日に拡大した所以は以下に述べる。

とげぬき地蔵の信仰は江戸時代・正徳三年（一七一三）にまで遡ることができる。とげぬき地蔵の由来は以下の通りである。

#### 高岩寺地蔵縁起

##### 武州江戸下谷高岩寺地蔵菩薩縁記

・・・正徳三年五月朔日より其母重き病を請心身安からず、・・・諸医手をつくすといへとも七月初に至此世のたのみすくなく成ぬ、・・・夢に貴き僧の黒き衣に香色の袈裟かけて枕に立告ていわく、我かたちを壱寸三分に彫刻して河水に流すへしとなり、・・・翌日より病氣段々年癒して、則十一月中旬、床をたち夫より此から無病に成ぬ、・・・此靈験を山高氏の家にて物語せしに、一座に西順といふ世捨人居合しか、深くかんし御影をこふ、其懐中にありしを二枚あたふ、此僧兼て毛利家へ出入せしか、正徳五年、かの家につかふる女、折たる針を口にくわへ、あやまつて吞、咽に立ぬ、□す後は腹中に入、甚痛くるしむ、諸薬御符其功なし、西順かいわく、夢に靈験明らか成地蔵の尊容有、頂戴すべしと一枚を水にて吞しむ、しばらく有て吐□す、・・・其後此印像ふかく秘して人にも見せず、然に此度、高岩寺本堂破壊に及、修造の為百万人講を初らる、幸に諸人御影をもほとこし、修覆の功早からしめん為初て和尚に此靈験を語、来由を書記して靈印とともに寄附し奉るもの也

享保十三戊申年七月十七日

田付美作是定六代之孫

田付又四郎敬書<sup>4</sup>

要は、地蔵の御影<sup>おみかげ</sup>を得て、川に流すか、飲み込めば、病気が治ることが記されている。

一七三二年刊『江戸砂子』では高岩寺の項に「はやり地蔵あり、尺ケ一寸ばかりの小仏也」（東京堂『江戸砂子』九五頁）とあり、当時の流行仏の一つであったことが分かる。また、一七三五年刊『続江戸砂子』では、「印像地蔵」として、以下のようにある。

印像地蔵 万頂山高岩寺 禅宗 下谷びやぶ坂禁

正徳三巳年田付氏某の妻病死万死一生たる時云、我が氏長谷川の家に霊ありて女子廿五歳を超ず、我今死を待のみ也。田付氏おれを聞、此上は神明仏陀の力ならではと常に信ずる所の地蔵尊を祈る。少眠る枕に一人の僧来て曰、此像一万躰うし、浅草川にうかめり。その夜 病人の夢の床に衰たるおのこの立るを高僧錫杖を以て追給ふと。夢ならず現ならず覺て明の日より全快におもむき終に死をのがれたりし也。此像因縁あて当寺に納まる。重病難病の者 此印像をいただくに、そのしるしあらずといふ事なし。くはしくは当寺靈験の記に見えたり。

（東京堂『江戸砂子』四六七頁）

この頃は、「印像地蔵」と呼ばれていたことが分かる。ちなみに、当時、高岩寺の本尊は、釈迦であり、とげぬき地蔵は地蔵堂に祀られていた<sup>7</sup>。

その後の文献には、高岩寺の印像地蔵の信仰を記すものはなく、流行ったのは一時期に過ぎなかった。高岩寺の地蔵御影の信仰が復活するのは、現・台東区下谷から明治二四年（一八九一）に現在地Ⅱ豊島区巢鴨に移転してからである。中山道沿いとは云え、当時は、交通の便は悪く（現・JR巢鴨駅すら未開業）、寺は経営難に陥る。電柱に「トゲヌキ地蔵」と貼り、宣伝に努めたことが功を奏し、参詣者が増える。明治時代後期であっても、とげぬき地蔵の、病氣治の功德を民衆は信じていたのである。但し、高岩寺は、明治十年（一八七七）には本尊をとげぬき地蔵に変更しており、廃仏毀釈・檀家制の廃止の中、早くから、とげぬき地蔵を寺復活の切り札と考えていたようである<sup>7</sup>。参詣者が増えたため、一九一〇年には、地蔵の縁日を二四日だけでなく、月の四日に拡大するようになった<sup>8</sup>。一九〇二年に巢鴨駅が

開業し、一九一三年に市電が巢鴨二丁目に達したため、交通の便も良くなり、参詣者も増加した。一九二九年、関東大震災復興計画の一環として、中山道が新道にシフトし、新道工事のため、高岩寺の墓地領域が削られる。高岩寺は墓地経営を断念、現世利益を中心とする祈祷寺の性格を強めてゆく。高岩寺にとつて幸運だったのは、旧中山道が直線だったため、高岩寺の参道のようになったことである。というのも、ここに露店の出店を奨励するからである<sup>10</sup>。これが今日の巢鴨地藏通りにつながる。一九三五年頃の賑わいは、相当なものであった。

昭和一〇年頃の賑わいは大変なもので、見世物小屋もかかり、今では見られないアメ細工、鉛筆、バナナの叩き売りなどの露店が両側に二百数十軒も出た。(『豊島区史 通史編二』八〇九頁)

第二次世界大戦によつて、高岩寺は全焼、周辺も焼け野原となる。旧中山道にはヤミ市が立ち、ここから戦後復興が始まる。

## 第二節 第二次世界大戦から現在

現在の如く、「おばあちゃん」が集まるようになるのは、一九七〇年代に入ってからである<sup>11</sup>。近隣の大正大学社会学研究室が、一九五七年に参詣者を調査した結果<sup>12</sup>では、女性では、年代別多数は三十年代・四十年代である。女性参詣者一三五名のうち、三〇代二九名、四〇代二九名である。五〇代一六名・六〇代一五名・七〇代七名は、今日から見るとその割合は少ない(日本人の平均寿命の問題もあるが)。男性も一〇〇名が参詣しており、女性が圧倒的に多いという訳ではない。「おばあちゃん原宿」という名称が生じたのは一九八〇年頃<sup>13</sup>であり、この名称がマスコミに登場したのは、一九八六年である<sup>14</sup>。

では、なぜ、一九七〇年頃に参詣者が変化したのだろうか？ 一つは、地下鉄都営三田線が一九六八年に部分開業し、交通の便が改善されたことによつて、遠方(\*ここでは徒歩では行けない距離を指す)より来れるようになったことが挙げられる。なお、確認すべきは、高岩寺に至る公共交通機関が、JRを除けば、都営三田線・都電荒川線・都バスであることである。美濃部都政期である、一九七〇年頃より、都内の高齢者は、都営交通の運賃がほぼ無料となった。高度経済成長による家事の電化によつて、おばあちゃんの仕事は減っていった。かつてのように、孫と同居しているケースも減少してきた。(統計によれば、一九六四年には、日本の七割が核家族的世帯になっている<sup>15</sup>)。暇をもてあました、おばあちゃんが、無料バスによつて、高岩寺に赴くようになったのである。確認しておけば、例えば池袋駅からとげぬ

き地蔵に赴く場合、普通だと、JR山手線を使い、巣鴨駅で降りるだろう。しかし、これだと、電車賃がかかる。池袋駅東口より都営草63のバスに乗って、とげぬき地蔵前停留所で降りれば、都内の高齢者は無料となる。時間に余裕があれば、この方法が使える。

一方、高度経済成長によって、露店で子ども関係の品が売れなくなった。おもちゃ屋・駄菓子屋の出現<sup>16</sup>によって、子どもの欲しいものは露店以外でも手に入るようになったからである<sup>17</sup>。一方、三田線開通等によって、これまでより広範囲の地域から高齢者がやってくるようになり、露店や通りの常店はモンストラ（モンペ型ストラックス）といった高齢者向けの商品を取り扱うようになった<sup>18</sup>。結果、相乗効果で、関東地方全域からおばあちゃんがやってくるようになったのである。

確認すべき点が二点ある。一点は、地蔵の御影に対する信仰が薄れてきている点である。冒頭の由来に記された通り、とげぬき地蔵の功德を受けるためには、御影を得ることが必須であった。ところが、今日、御影を得ることよりも、境内の洗い観音を洗うことや、香炉の煙を浴びることが中心となっている。双方とも自分の悪い部位を洗う、もしくは悪い部位に煙を浴びると治ると信じられている。大島史子の調査によれば、本堂に詣る者八六%、お守り売り場に行く者二六%、洗い観音を洗う者五七%、香炉の煙を浴びる者八八%となる<sup>19</sup>（当然、重複回答である）。なお、洗い観音を洗う者五七%は、さほど高くない数字だが、これは待ち時間が長い<sup>20</sup>ためであり、潜在的にはもっと希望が多いと想定される。傾向としては、御影をお守りとして買うよりも、洗い観音を洗う・香炉の煙を浴びるといった行為の方が好まれるのである。一九五七年の大正大学の調査報告では既に以下のようにある。

「とげぬき地蔵尊」に於いては行はれて居る祈願の直接的なとしては、次の如き方法がある。即ち

一、とげぬきの守札を患部に当てる、或は飲み下す方法。

二、本堂前の香炉に線香を焚き、その煙に手をかざして後その手で患部をなせる方法。

三、境内に安置してある石の地蔵尊の躰の内、自分の患部に当る辺りを、水に浸したタワシで洗ふ方法。

三の「石の地蔵尊」が気になるところだが、タワシで洗うということからすると、初代洗い観音の間違いであろう（後述）。

では何故、地蔵の御影を得るといふ形態から―これを残しつつも―洗い観音を洗うという形態に変化していったのであろうか？ この問いの答えは、今となっては分かりようもないが、一つ云えるのは、御影を得て呑む下す、もしくは患部に当てるという行為は、本人が行か

なくても済む行為である。即ち、病人の代わりに誰かが行けば良い。先の報告書が一九五七年ということは、「戦後が終わって」健康保険が普及し始めた時期である。（国民皆保険は一九五五年より目標とされ、一九六一年に達成<sup>21</sup>）貧しい人でも病気の際、病院に行けるようになった。つまり戦前とは違い、重病人が、とげぬき地蔵の御影に全面的にすがらなければならないようになった。健康増進と観光を兼ねてとげぬき地蔵に詣るようになったのである。川添『おばあちゃんの原宿』に載せる、内山の談話は、何かあれば医者に診て貰うという習慣が定着する前の実態を示すものである。

子どもの頃、魚のとげが喉にひっかかると必ずお札を飲まされた。（一九六頁）

健康保険普及以前は、近隣の人々は何かあればとげぬき地蔵に参り、御影を得て対処するしかない状況であった。ゆえにとげぬき地蔵信仰が時代が下っても存続したのである。健康保険が普及したことによって、まずは医者にかかるように変わっていったのである。

初代洗い観音の由来に関し、現在の高岩寺は、明暦の大火の後に寄進されたとする<sup>22</sup>が、にわかには信じがたい。というのも江戸時代の記録にはないからである。言い伝えによると、昭和初期にその信仰が確認される。

今、洗い観音なんて行って行列を作って石を洗っていますが、あれは3代前の住職だから60年以上前の頃でしょう。観音様の石像に願を掛けながら水で洗ったら願いがなかった。それが言い伝えられて皆が洗うようになった。ある時あそこに水汲み婆さんが現れて、隣の越後屋の井戸から水を汲んで来ては参詣人に銭を催促するようになった。それで住職が怒って水道を引いたと言うことです。（巢鴨のむかしを語り合う会編『巢鴨のむかし 第一集』一九八九年）

戦後、初代洗い観音を洗う手段は、主に境内で販売された亀の子タワシであった。亀の子タワシ製造は地元の産業である<sup>23</sup>。戦後、御影の地位低下と地元との結びつき強化<sup>24</sup>から、洗い観音をタワシで洗うという儀礼を高岩寺が推すようになったと考えられる。川添に載せる談話の一部を以下、引用する。

西村 水洗い観音なんか、戦前はあんまり人気がなかったそうですね。

吉田 そうらしいですね。戦後のことらしいです。とげぬき地蔵は昔からだけど、水洗い観音の方は新しいんだそうです。（一六九頁）  
そして、タワシ越しとは云え、「聖なるもの」に直接触れる行為は説得力を有したのではなからうか？ なお、初代洗い観音は、タワシで

研かれた結果、凹凸がなくなり、一九九二年に二代目に代わっている。(二代目はタオルで洗う。)

洗い観音を洗うことを中心とする参詣者でも、その意識は「とげぬき地蔵に参った」と解釈される。といえるのも、地蔵の縁日に人が集まるからである。一九六三年の写真「写真一」に於いて、洗い観音は地蔵と勘違いさせるが如く、赤い前掛けをしていた<sup>25</sup>。そのため、洗い観音が地蔵とされることもあった。先の大正大学報告書が地蔵と見誤ったのはそのせいであろう。一九六二年に書かれた小説に以下のようにある。

かたわらに石の地蔵尊があつて、この方は信者たちが柄杓で水をかけたり、たわしでこすったりしている。やっぱりそうすると病気が癒るといふ信仰であろう。(鹿島孝二『葡萄酒息子』桃源社 一〇五頁)

一九六六年の文章に以下のようにある。

本堂との間にある大香炉は線香で燃えさかる。その左奥の前垂をかけた五尺ほどのとげぬき地蔵へ信者が列をなして杓の水で、心のなやみを落とすように洗っている。(鈴波「とげぬき地蔵」『川柳きやり』第四七巻第九号)

一九七四年の文章にも以下のようにある。

境内の片隅にある石地蔵に水を掛けて、タワシでこするオマジナイに列が出来ている。自分の身体の悪い部分を石地蔵におきかえて、こすることにより治癒祈願するわけだがあつきり帰る人もあるが、なかには待つ人のことも考えず、永々と頭のテッペンから足の先までやっているインゴウバアサンもいる。(山本富夫「心のトゲを抜く巢鴨とげぬき地蔵」『自警』第五六巻第六号)

一九八〇年代後半になると、初代洗い観音は凹凸を失い、ますます地蔵と勘違いされるようになった<sup>26</sup>。例えば、永倉万治『とげぬき地蔵通信』(一九八九年 ダイナミックセラーズ)というエッセイ集の冒頭には以下のようにある。

東京巢鴨に「とげぬき地蔵尊」というアリガタイお地蔵さまがある。境内の片隅にある小さなお地蔵様をタワシでゴシゴシすると無病息災、病氣平癒、その他モロモロの御利益があるとかないとか。あるいは、ここのお札を飲むと、知らぬ内にとげが抜けるとか体の痛みがとれるとか。(七頁)

明らかに、とげぬき地蔵と洗い観音とが混同されている。

二代目になっても地藏との混同が無くなった訳ではない。伊藤比呂美の小説『とげ抜き 新巢鴨地藏縁起』（初出二〇〇七年 講談社）でも以下のような母と娘との会話がある。

巢鴨の駅前から庚申塚のほうまでびっしりととが見えるくらいなんだから、巢鴨で降りるとまた戻らなくちゃいけないからあたしたちは庚申塚でおりに行った。

お地藏さまに行ったら何をしますの？

そりやおやまのほうに行つて、こんな大きなおかまがあるからそこにお線香投げて煙で悪いところをこすつて、それから洗うにきまつている。

何を？

はだか地藏。

洗い観音じゃないの？

ちがう、と母はきっぱり申しました。（三九〇～四〇〇頁）

作者は、洗い観音と認識しつつも、小説の中で、あえて地藏との勘違いを書いている。これは、時に洗い観音をとげぬき地藏と混同することがあることを背景としていると解釈されよう。また支倉清・伊藤時彦『お稻荷様つて、神様？ 仏様？』（二〇一〇年 筑地書館）には以下のようにある。

現在、とげぬき地藏で有名な高岩寺で一番人気は「洗い観音」である。・・・寺では「洗い観音」の表示を出していない。そのせいもあってか、あまりにとげぬき地藏が有名なので、多くの参詣人がこの観音を地藏と勘違いしている。それは並んで順番を待つ人びとの会話からはっきりとわかる。

「お地藏さんを洗ってから本堂にお参りしましょう」

悪いところが治りさえすれば、地藏でも観音でも構わないのだ。ほとんどの参詣人には、仏の姿から地藏か観音か見分けることが困難なのかもしれない。（七五～七六頁）

以上のような会話は、私が二〇一四年九月二四日・二六日に行った現地調査でも聞かれた。やはり、とげぬき地蔵の境内にあるからこそ、洗い観音への現世利益的信仰があるのである<sup>27</sup>。

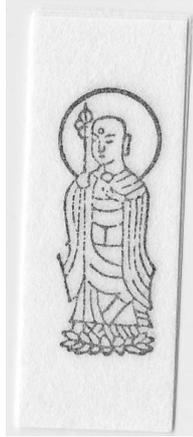
確認すべき第二点は、高岩寺には、高齢者が多く集まるにも拘わらず、巢鴨地蔵通りには、仏具店・墓地販売店等死と繋がる商売は希薄なことである。川添の調査によると、一九九〇年段階で、巢鴨地蔵通り商店街全一八三軒のうち、仏具屋は二軒である<sup>28</sup>。二〇一四年九月二四日の現地調査では、仏具・神具店が一軒、終活サポートセンターが一軒あった。就活サポートセンターには、ほとんど人の出入りは無かった。一方、無料サービスのある、マッサージュ店には人ばかりが出来ていた。巢鴨地蔵通りは、現世安楽の場所であり、死のイメージはそぐわないのである。即ち、高岩寺のとげぬき地蔵は現世利益の職能のみ期待されているのである。

無論、現代日本に於いて、現世利益の職能が期待されている地蔵は巢鴨のとげぬき地蔵だけではない。例えば、江戸時代より連綿と続く、京都の六地藏めぐりは、新仏供養と共に家内安全の利益を得ると信じられている。京都のみならず、滋賀県<sup>29</sup>・奈良県<sup>30</sup>・兵庫県<sup>31</sup>等、全国的に、地藏盆・地藏祭に於いては数珠繰りを行うところが多い。数珠繰りは、無病息災等、現世利益を期待するものである。であれば、地藏盆の目的の一つは、地藏像に現世利益を祈ることとなる。

京都府京都市伏見区深草大門に存する、ふりこべ地藏の職能は、歯痛平癒である。少なくとも、二〇〇〇年代に入っても、全国から祈願の手紙が届いていた<sup>32</sup>。

無論、時代の流れの中で、地藏の現世利益の職能が廃れていく事もあった。東京都練馬区中村南に存する、首つき地藏に対して、一時期、サラリーマンが「くびになりませんように」と祈願することが流行った<sup>33</sup>。二〇一五年現在、その信仰は忘れ去られている。

\* 『江戸砂子』、『続江戸砂子』はいずれも小池章太郎編『江戸砂子』（一九七六年 東京堂）より引用。



「写真二」とげぬき地藏尊御影

「写真一」『明星』第十二卷第十一号、一九六三年より。説明文でも「地藏」とされている。



「写真四」東京都台東区上野桜木・浄名院の洗い地蔵脇のたわし・スポンジ。二〇一四年九月撮影。



「写真三」東京都台東区上野桜木・浄名院の洗い地蔵。二〇一四年九月撮影。

- 1 江戸時代に於いては本尊は釈迦だったが、明治時代になると本尊は地蔵に変わっている。川添登は、廃仏毀釈の中の生き残り策として  
いる。川添「巢鴨とげぬき地蔵（万頂山高岩寺）の変容と発展」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第三三号 一九九一年）
- 2 延命地蔵とされるが、姿を写したとされる御影では立像である「写真二」。
- 3 竹内宏『とげぬき地蔵商店街の経済学』（二〇〇五年 \*二〇〇一年刊を修正加筆 日本経済新聞社）二一九頁に載せるアンケートに於  
いて、「どこから来たのか？」という問いに対して、「東京23区内51% 東京都下9% 埼玉県20% 千葉県10% 神奈川県6% その  
他4%」とある。
- 4 川添登「巢鴨とげぬき地蔵（万頂山高岩寺）の変容と発展」（前掲）より引用。原本は高岩寺蔵だが、『とげぬき地蔵尊 高岩寺誌』（二  
〇〇〇年 高岩寺）に載せる現代語訳『とげぬき地蔵尊御縁起妙』と対応している。
- 5 川添登「巢鴨とげぬき地蔵（万頂山高岩寺）の変容と発展」（前掲）。
- 6 川添登「信ずべし頼むべし」同編『おばあちゃんの原宿』（一九八九年 平凡社）一八頁
- 7 川添登「巢鴨とげぬき地蔵（万頂山高岩寺）の変容と発展」
- 8 川添登「巢鴨とげぬき地蔵（万頂山高岩寺）の変容と発展」
- 9 倉沢進「とげぬき地蔵への招待」同編『大都市高齢者と盛り場』（一九九三年 日本評論社）二四頁
- 10 川添登「巢鴨とげぬき地蔵（万頂山高岩寺）の変容と発展」（前掲）
- 11 山本富夫「心のトゲを抜く巢鴨とげぬき地蔵」（『自警』第五六巻第六号 一九七四年）を読むと、この頃には既におばあちゃんが多か  
ったことが分かる。苗治帥「人が集まる「場所」に関する研究」（『流通経済大学大学院社会学研究科論集』第十六号 二〇〇九年）で  
は、「昭和45（1970）年ごろになってくると、近くに大型のスーパーマーケットなどの誕生によって、商店街が急増してきた参詣客に  
おもてなしを基本とした街づくりが始まった。」とあるので、一九七〇年代に変化があったことは確かである。

- 12 吉田雅男「とげぬき地蔵の信仰調査」(『仏教と民俗』第二号 一九五八年)
- 13 川添登「巢鴨とげぬき地蔵(万頂山高岩寺)の変容と発展」(前掲)
- 14 苗治帥「人が集まる「場所」に関する研究」(前掲)
- 15 松原治郎『核家族時代』(一九六九年 NHKブックス)二〇頁
- 16 多くの駄菓子屋は一九五〇年代前後に開店した。加藤理『駄菓子屋・読み物と子どもの近代』(二〇〇〇年 青弓社)一五二頁
- 17 川添「巢鴨とげぬき地蔵(万頂山高岩寺)の変容と発展」前掲
- 18 松崎憲三『地蔵と閻魔・奪衣婆』(前掲)一九〇頁
- 19 大島史子「心のとげを抜きあって」(川添登編『おばあちゃんの原宿』)一三〇頁
- 20 朝日新聞一九九四年五月二五日付けには「洗い観音に長い列 豊島区巢鴨高岩寺」なる記事が記載されている。
- 21 吉原健二・和田勝『日本医療保険制度史』(二〇〇八年 東洋経済新報社)一四四〜一四五頁
- 22 『高岩寺誌』(前掲)三二二頁
- 23 亀の子タワシを製造している、西尾商店の本部・工場は、北区滝野川という高岩寺に近い場所にある。(亀の子タワシは、西尾商店が商標登録しているものである。)かつて、タワシ販売は露店の目玉であったが、二〇一四年九月の調査に於いて、露店では亀の子タワシを販売していなかった。
- 24 現在、高岩寺と地元との結びつきは強いが、戦前はそうではなかった。地元との結びつきが強化されたのは戦後になってからである。
- 天野徹「地蔵通りの変遷」倉沢進編『大都市高齢者と盛り場』(前掲)五八頁
- 25 「トゲヌキ地蔵繁昌記」(『大世界』第十二巻第八号 一九五七年)に「洗い観音を、タワシでこするべく、・・・その観音さまが、赤いヨダレかけをしている」とあるので、この頃は赤い前掛けをしていたことは間違いなさそうである。
- 26 渡浩一「とげぬき地蔵の信仰と民俗」(瀬戸内寂聴・他監修『仏教行事歳時記 放生』一九八九年 第一法規出版)
- 27 傍証なので、註の場を借りる。もう一つ考えるべき問題は、類似の洗い地蔵は全国に散見するが、高岩寺内洗い観音ほどの信仰を集め

てはいないことである。例えば、東京都台東区上野桜木に在る、浄名院の洗い地蔵には、タワシが用意されていたが、信仰を集めている気配は無かった(二〇一四年九月調査「写真三・四」)。

28 川添登「巢鴨とげぬき地蔵(万頂山高岩寺)の変容と発展」前掲

29 林英一『地蔵盆』(前掲)。

30 清水邦彦「奈良県奈良市市街地の地蔵盆」(前掲)。

31 大森恵子「但馬地方の地蔵盆行事と愛宕信仰」(前掲)・西宮市立郷土資料館『西宮の地蔵』(二〇一三年 西宮市教育委員会)。

32 大島建彦「ぬりこべ地蔵」(『民俗伝承の現在』二〇一一年 三弥井書店 \*初出二〇〇三年)

33 三吉朋十『武蔵野の地蔵尊 東京編』(前掲) 五〇〜五一頁。

### 第三章 生身で現れる地蔵

#### 第一節 文明開化と地蔵

第一・二章に於いては、明治時代以降でも、地蔵の、死者供養の職能や現世利益の職能が残っていることを確認した。では、「生身で現れる」という点はどうだろうか？

一八八七年に刊行された、『地蔵菩薩明治靈驗報道編』は、云わば、最後の地蔵説話集である。全五五話からなり、全て現世利益の話である。一八七一年（明治六）から、一八八七年（明治二〇）までの話を年代順に記している。うち、第十五話のみ、地蔵の化身と覚しき僧が登場している。

弟ガ宅ニハ一日一僧アリ。門ニ來リ告テ曰ク、「汝ガ難病 世間医薬ノ療ヘキニ非ス。須ク地蔵菩薩ノ本願ニ縋リ利益ヲ希スシト。（私架蔵本八丁表〜九丁裏 八丁裏〜九丁表には「絵一」引用に当たり、句点」を補た。）

これを「一話ある」と見るか、「二話しか無い」と見るかは、解釈の分かれるところである。残りの五四話には生身の地蔵が登場しないことを考えると、地蔵から現世利益を授かるに、生身に会う必要が無くなったと解釈すべきであろう。この傾向は、江戸時代にも見られたことは、第三部で述べた。

『東京絵入新聞』明治十一年 一八七〇 五月二八日付には、石地蔵が団子を喰う話を載せている。

西洋各国の狐狸は形容を変じて人を誑すことなしか、……傍の藪蔭を見てあれば石地蔵尊はゆらゆらと焼団子を喰ながら此方をさして来るさまに……石像の物喰ふ事は開化の世にも聞ならはねば是こそ天狗木霊が地蔵尊の形容をかりて居たるならめ……それは古狸の所為なるべし新七阿兄が斬りしといへば……狸が脳をしたたか打破ればや氣息絶て居たり（湯本豪一編『明治妖怪新聞』六七〜六八頁）

但し、文明開化の世にあつては、石地蔵が人間の如く動くことはあり得ず、狸の仕業としている。

#### 第二節 昔話

では、地蔵が生身となって現れる、という観念は消滅してしまったのだろうか、ということでも無い。この観念は、昔話に残っている。本論文で云う、昔話は、『大辞泉』の以下の定義による。

②民俗学で、口承文芸の一。子供に語って聞かせるたぐいの、空想的な世界を内容とする話。

「子供に語り聞かせる」という点が、これまで取り上げてきた説話とは異なる。また、もともとは、「語り」であったが、語りの場が変質した現在、昔話というと、絵本やアニメを指す場合も多くなってきた。

昔話に於いて、地蔵はしばしば登場する。その代表例として、主に「笠地蔵」を取り上げる。一九七〇年代にまとめられた、『日本昔話通観』では、計二七県<sup>2</sup>で確認される。『日本説話伝説大事典』(二〇〇〇年)では、「北海道、沖縄を除く各地に伝えられている」としている。「笠地蔵」では、地蔵は、人間の如く、掛け声を挙げて、米等を届けてくれる。

「ヨッシヨオ、ヨッシヨオ、おずんファンおばんファン、戸をあげろ」て、いわば、ねエ、お地蔵様だずね。(宮城県栗原郡高清水町小山田<sup>3</sup>、『日本昔話通観』第四卷五八頁)

「エッサエッサ」と何かを引っ張って来た音アしたへで、・・・六地蔵様達ア何か引っはって来たへで(岩手県二戸市、前同第三卷一四〇頁)

「六兵衛！六兵衛！六兵衛！」(福島県大沼郡昭和村、前同第七卷六七頁)

「昨日のお礼だ」ドサーツという音がすんだと、(山形県西村山郡西川町月山沢、前同第六卷二六頁)

地蔵さま「さっきの爺ちゃんの家」はここだが。笠のお礼を持って来たあ(秋田県平鹿郡増田町<sup>4</sup>下夕町、前同第五卷一六六頁) 玄関の戸を開けて開いたと。「えーとーなー、えーとーなー。・・・」(新潟県東蒲原郡上川村<sup>5</sup>、前同第十卷一〇六頁)

「ヨイシヨコ、ヨイシヨコ、ドッコイ、おじじ起きて下され、金もってきたぞ・・・」(富山県氷見市、前同第十一卷一六三頁) 六人の地蔵が来て、「ごま餅<sup>3</sup>枚、きび餅<sup>3</sup>枚」と言って(山梨県西八代郡市川大門町<sup>6</sup>黒沢、前同第十二卷六四頁)

「よいやせい」と何かを引いてくる。(兵庫県美方郡城山、第十六卷一一九頁)

民俗調査で採録された、昔話では、「笠地蔵」以外に、「地蔵浄土」・「言うなの地蔵」・「継子の木の実拾い」・「運定め」<sup>7</sup>に於いて、地

蔵は人間の如く、声を発している。言い換えれば、生身で登場しているのである。これは、他の仏神に比べると、数的には圧倒的に多い。例外的なのは、観音であり、「わらしべ長者」に於いては、お告げを下すことがある。しかし、地藏と異なり、直接的に救済している訳ではない。

この傾向は、一九七〇年代以降、語りの場が変化し、昔話Ⅱ絵本<sup>8</sup>・アニメとなっても変わらない。まず確認すべき点は、「笠地藏」は人気作品であったことである。国会図書館 HP による、検索を使うと、一九七〇年以降、「かさじぞう」（「笠地藏」）というタイトルの絵本は、計六八冊も編集・出版されている。絵本の「かさじぞう」でも地藏は、掛け声を挙げて、家に向かっていて。

じよいやさ じよいやさ シャーン シャーン じぞうに かさこ かぶせてくれた じいの 家は どこだ（松谷みよ子『おむすびころころ かさじぞう』<sup>10</sup> ほか）<sup>11</sup>（一九九七年 講談社V三二頁）

絵本に於いても地藏の人気は変化することは無かった。「かさじぞう」が計六八冊編集・出版されたに対し、「観音」（「かんのん」）をタイトルに含む絵本は、十七冊<sup>12</sup>しか出版されていない。阿弥陀・弥勒・道祖神・庚申等も、多くて二冊程度出版されるに過ぎない。地藏は生身で直接的に行動するため、昔話に登場しやすく、引き続き絵本にも登場したのである。

一九七五年〜九四年の間、MBS 製作・TBS 系列で放映された、「まんが日本昔ばなし」に於いて、「笠地藏」は第一回に放映された（一九七五年一月七日）。同番組企画者・川内彩友美<sup>12</sup>によると、昔話の代表格として、「笠地藏」が第一回放映に選ばれた<sup>13</sup>。残念ながら、当該話は DVD 化されていないので、絵本化されたものを引用する。

「えっさ、ほいさ。えっさ、ほいさ。」

しんと しずまりかえった 山道を、にもつを かついで あるく、人かげがありました。なんと！ それは かさを かぶった あのおじぞうさまたちです。・・・こそそつ。雪の かたまりが うごいたかと おもったら、ちっこい おじぞうさまが ぴよこんと 顔を だしたではありませんか。どうやら ひとりだけ にげおくれたようです。ちっこい おじぞうさまは、ふらりに ペこりと 頭を さげると、わすれもののかさを ひろいあげ、ひよこひよこ かえって いきました。（川内彩友美・企画『まんが日本昔ばなし かさじぞう』<sup>14</sup>（一九九〇年 講談社V十六〜二四頁）

この絵本に於いて、地藏の歩く姿を「人かげ」と表現している。そして、掛け声を挙げ、お札に頭を下げる、というように、その行動は人間的である。言い換えれば、生身として登場しているのである。

「絵一」



1 原文には、第〇話という表記は無いが、便宜上、付した。

2 青森県・岩手県・秋田県・宮城県・山形県・福島県・埼玉県・山梨県・

神奈川県・新潟県・富山県・石川県・福井県・長野県・岐阜県・滋賀県・京都府・兵庫県・鳥取県・島根県・岡山県・広島県・愛媛県・徳島県・大分県・熊本県・鹿児島県。

3 現・栗原市高清水。なお、字小山田は分割され、これ以上、現在の地名に当てはめるのは不可能である。

4 現・横手市増田町。

5 現・東蒲原郡阿賀町。

6 現・西八代郡市川三郷町。

7 以上は、原題では無く、分類名である。

8 昔話の絵本化は、これ以前から行われていた。

9 再話者が同一の場合、一冊と数えた。

10 松谷による解説によると、「山の村のおばあさんが、「六人子どもを持ったが六人死んだ。六地藏になったと思った……。」「とぼつりつぶやいたことがありました。その言葉を聞いたとき、ああ、だからじいさまは、六地藏に笠をかぶせてやったのだ、と聞いてました」（前掲書七八頁）とある。即ち、昔話「笠地藏」が死者供養の話でもあることを示唆している。

11 「わらしべ長者」を含めれば、数は増えるが、「わらしべ長者」に必ず観音が登場する訳ではない。

12 作家・川内康範の娘。

13 川内彩友美『まんが日本昔ばなし今むかし』（二〇一四年 展望社）二頁。

結論―補足を兼ねて

以上、五部に渡り、中国唐・宋から現代日本に渡る地藏信仰を論じてきた。そこで序で提示した、なぜ外来の菩薩である地藏は、これほどまでに浸透したのか、という問題に答える目的で、各部をまとめたい。

## 第一節 各部

### 第一部 古代に於ける中国からの經典・説話集の伝播と展開

まず地藏は大乗仏教後期に生じた菩薩であり、それ故、主に僧形を取ることを確認した。地藏はインドの大地神との習合から生じたものだった。インド撰述『十輪經』に於いては五濁惡世に於いて衆生を天へ導く者とされていた。中国撰述『本願經』に於いては、上記に加えて、衆生を地獄から救済し、現世利益を施すとされていた。また、救済のため、主に僧形ながら、種々の姿を取ることも特徴である。地藏は大乗菩薩仏教運動の後期に生じたものゆえ、民衆にとって身近な救済としての位置付けだったのである。

しかし、地藏信仰はインドではさほど発達しなかった。こうした地藏＝身近な救済者という觀念を中国の化俗法師（本論文で云う唱導僧）が、唱導に使い、その際、家族倫理等中国的要素と習合させた。その成果を集めたのが、『地藏菩薩応驗記』である。

『地藏菩薩応驗記』では、地藏は、①冥府・地獄からの救済②現世利益③後生善処への引導、の三つの役割を担っていた。確認すべきは、天へ引導する場合と西方浄土への引導する場合が併存していたことである。というのも、『十輪經』・『本願經』には、弥勒のいる天への引導が述べられ、阿弥陀仏・西方浄土が登場しないからである。唱導僧たちは民衆の要求をくみ取り、このように經典に無い事柄を導入したのである。また、『応驗記』に於いて、地藏が僧の姿（＝生身）で現世及び冥府等に現れるのが特徴である。この点は經典の継承と云える。

日本に地藏の觀念は、天平時代には輸入されていたが、信仰されていなかったことを確認した。日本で地藏が信仰されるようになるのは、平安後期になってからであり、このことは、『今昔』第十七卷にまとまった地藏説話が収録されていること、地藏像が全国各地に―散発的ながら―建立されていることの二点から裏付けられる。なお、平安後期に受容されるようになった要因として、末法思想とこれに伴う穢れ観が想定される。

『今昔』が唱導用に編集されたかどうかは定かではないが、唱導に使われた説話を集めたものであることは確かである。『今昔』の地蔵説話において、地蔵は、①冥府・地獄からの救済②現世利益③西方浄土への引導、の三つの役割を担っていた。この点は、『応驗記』と類似している。また、生身で現れる点も『応驗記』の継承である。異なっているのは、『応驗記』では、天へ引導する話があったに対し、『今昔』には無いことである。これは当時の日本で、弥勒上生信仰が衰退していたことを反映していると同時に、『今昔』の編集方針の可能性を示唆した。その他、『法華経』との兼修や地獄が立山にあるとされていることなど、『応驗記』にはない、特徴も見られる。『今昔』の地蔵説話を見ると、当時、地蔵信仰を天台や真言の聖が布教していたと考えられる。聖たちは経典や中国の説話を踏まえながら、民衆の要求や宗派の特徴などを取り入れ、唱導を行っていたと考えられる。

## 第二部 中世の地蔵信仰

第二部では、まず、先行研究では、法然浄土教の登場によって、地蔵信仰が現世利益中心となったとする説があることを確認した。しかし、既に渡浩一が指摘するが如く、中世地蔵説話において、地蔵が依然として、地獄からの救済・西方浄土への引導を担っていることから、まず再考を余儀なくされる。

そこで、第二章～第八章では、鎌倉仏教各宗派における地蔵の位置づけを分析した。宗派によって違いはあるものの、いずれも地蔵を地獄からの救済者・後生善処への引導者として位置づけていた。とすると、法然浄土教の出現によって、地蔵信仰が現世利益中心に変化していったとする説はやはり成立しえない。むしろ、浄土宗や曹洞宗・時衆といった、国家と距離を置いた宗派系の聖たちは地蔵信仰を死者供養に積極的に活用していた。そして、聖たちの布教によって、徐々に各宗派が広まると共に、地蔵信仰が広まってきた。

しかしながら、中世に於いて、地蔵信仰が変化しなかったではない。地蔵関連の史料を分析すると、各地蔵像の個別化・地蔵の職能の明確化が読み取れる。具体的には、個別の地蔵像が、各自、田植え・病気治し・戦さでの勝利の職能を行うとされるようになったことである。これらはいずれも当時の武士や民衆が必要としていたものであるが、『十輪経』・『本願経』に必ずしも明記されている訳で

も無い。聖ひじりといった唱導僧は民衆の要求を上手く取り入れることで、地蔵信仰を布教していったのである。

中世に於いて、地蔵信仰が広まった理由として、地蔵は生身いきみの菩薩であり、直接的に救済してくれると信じられていたことが挙げられる。こうした地蔵の性格は『応驗記』にも見られ、その起源は、『十輪經』・『本願經』に求められる。即ち、地蔵思想が大乗菩薩佛教思想の後期の代表格であったことが反映しているのである。但し、中世の地蔵に関する文献では『十輪經』・『本願經』の引用はほとんど見られない。前述の通り、唱導僧は、經典の要素と民衆の要求とを習合させて、地蔵信仰を布教していったのである。

また、中世に於いて、地蔵の現世利益的職能が、田植え・病氣治し・戦さでの勝利等個別の事柄に特化しつつあったことも論述した。これらはいずれも武士や民衆が願っているものである。唱導僧は、民衆の要求を上手く取り入れることで、地蔵信仰を布教していったのである。

### 第三部 江戸時代の地蔵信仰

第三部では、まず江戸時代に於いて、地蔵説話集が多数編集され、多くは出版されたことを確認した。地蔵説話集の編集はまず第一には、唱導のためである。出版されたものは商業目的もあつたと考えられるが、購入目的が唱導のための可能性も多分にある。なお、新たに出版される説話集には新たに生じた説話が収められる傾向があり、説話（言い換えれば奇瑞）が新たに生み出されていたと云える。江戸時代は檀家制の時代であつたが、唱導が行われなくなった訳ではない。そのために新たな説話が生み出されたのである。また、多数出版されたということは、民衆の需要があつたのである。説話集を分析すると、地蔵の活躍の場が現世を中心とするようになったことが分かる。しかしながら賽の河原に於いて子どもを救済する職能も有していたことから分かる通り、死者供養の職能が一切消滅した訳ではないことを論じた。このことの傍証として、路傍の地蔵像は、道祖神との習合ではなく、死者供養を目的として祀られるようになったことが挙げられる。路傍の地蔵像は、死者供養を目的として、造立されたためか、錫杖を持つタイプとともに、合掌する地蔵像も多い。合掌形は、死者供養を目的に造立されたと考えられる。但し、本論文では東京23区域を中心に分析するに留まつた。

説話集を分析すると、現世利益を得るために、必ずしも生身の地蔵に会う必要がなくなったこと、地蔵像を破壊すると、罰を受ける

話が生じたこと、さらに生身の地蔵が悪戯をする話が生じたことが明らかになった。

#### 第四部 明治時代から現代の地蔵信仰

第四部では、とげぬき地蔵の如く、現世利益の機能が強調されることがあった一方、明治時代以降でも水子供養等非業の死者を供養する職能を有していたことを論じた。また、生身地蔵という觀念が薄れてきたことも論じた。

地租改正の影響で路傍に地蔵像が立てられることは減少した。しかし、路傍に面する私有地に非業の死を供養するために立てられることはある。また、一九七〇年代以降、寺・墓地等に、水子供養の為に水子地蔵を立てることが一般化した。一九七〇年代に収集された昔話を見ると、笠地蔵の如く、生身の地蔵が活躍する話が存した。昔ながらの昔話の語りの場は消滅しつつあるが、絵本・テレビ番組等に形を変えて継承されている。

#### 第二節 結論と今後の課題

##### (1) 結論

地蔵はなにゆえ、もつとも日本的な「カミ」となったのか？ 本論文冒頭、「問題提起」に於いて、ハーンを引用し、以上の問題提起を行った。この問題を倒叙法で考えたい。現代日本人は、仏像を見ると、「ジゾウ」と呼ぶ傾向がある。これは路傍に立つ仏像・神像として、地蔵像の数が圧倒的だからである。なぜ、路傍に地蔵像が立てられるようになったのか？ その時期は江戸時代だが、本論文第三部では、地蔵像造立は、死者供養を目的としていた、という結論となった。では何故、死者供養の代表格として、地蔵が選ばれたのか？ 第二部で論じた通り、中世に於いて、地蔵は生身で現れる存在であり、時に地獄で鬼と対峙し、時に地獄苦に苦しんでいる人に文字通り、手を差し伸べる存在であったからである。ゆえに、中世より、京都では、六地藏参りが行われ、これが江戸時代の六地藏めぐり・地藏祭に繋がる。なお、生身で現れるのは地蔵に限った訳ではないが、地蔵は具体的救済を行っていたことが特徴である。

では、中世に於いて、生身で現れる仏神の代表が地蔵とされたのは、何故かと言えば、地蔵は、もともと、経典に於いて僧形で現れ

る存在とされていたからである。なお、観音は經典に則り、インドの貴族の姿で現されることが多く、このことが、観音が地蔵に比べると、民衆に浸透しなかった一因と考えられる。

無論、地蔵信仰を布教した、唱導僧が經典を熟読していた訳でもないし、經典に沿って布教していた訳でもない。唱導僧たちは、時に耳学問で地蔵を知り、民衆の要求と習合させることで、地蔵信仰を作り上げていったのである。

## (2) 今後の課題

無論、この論述で全てが解決した訳ではない。もう少し史料を漁れば、唱導僧の実態、といった問題に迫れる可能性がある。

本論文では、適宜、他の仏・菩薩との比較を試みたが、充分ではなかった。例えば、江戸時代の観音説話を分析するに、『観音冥応集』しか取り上げることができなかった。江戸時代に於ける、観音説話・阿弥陀説話等の分析は今後の課題としたい。

また、生身としての地蔵という觀念と日本の神觀念との比較も、十分な形ではできなかった。

さらに、中国との比較も、『地蔵菩薩応驗記』の分析のみに留まり、これ以降の中国地蔵信仰の展開に関しては、論述できなかった。

この後、中国では、地蔵は、時に新羅の王子、金喬覺として現世に現れたとされ、時に地蔵王と称される。こうした日本とは異なる展開に関して、本論文では言及ができなかった。今後、F. Wang-Toutain "Le Bodhisatva Kistigarha en Chine du V au X III Siecle" (前掲)・莊明興『中国中古的地蔵信仰』(一九九九年 台湾大学出版局)・張总『地蔵信仰研究』(二〇〇三年 宗教文化出版社)・尹富『中国地蔵信仰研究』(二〇〇九年 巴蜀書社)などを熟読し、日本との比較を試みたい。

朝鮮半島との比較も充分にはできなかった。日本同様、朝鮮半島の地蔵信仰も中国から影響を受け、さらに朝鮮半島の地蔵信仰は日本に影響を与えた可能性がある。本論文では、朝鮮半島の十王図が日本に入ってきたことを言及するに留まった。今後、イソキン『地獄図』(一九九二年 デウン社)・金廷禧『朝鮮時代地蔵十王図』(前掲)を熟読することで、朝鮮半島の地蔵信仰を研究する緒としたい。

- 1 二階堂善弘「日中の地藏菩薩の差異と文化交渉」(『アジアの民間信仰と文化交渉』二〇一二年 関西大学出版局)。
- 2 周樹佳「地藏王」(『香港諸神』二〇〇九年 中華書局)。

参考文献 \*事典・図録の類は除いた

\*著者・編者と発行者とが同一の場合、発行者を省いた

\*結論部で名前だけ挙げているものは除いた。

日本語

愛甲昇寛『中世町石卒塔婆の研究』（一九九四年 ビジネス出版社）

縣敏夫『図説庚申塔』（一九九九年 揺籃社）

秋月龍珉・他『対談 新大乘』（一九八九年 鈴木出版）

秋山和歩『お地蔵様との出会いの日々 与野・大宮・浦和を歩く』（二〇〇三年 埼玉新聞社）

浅井和春「平安前期地蔵菩薩像の研究」（『東京国立博物館紀要』 第二二卷第一号 一九八七年）

浅井成海「証空教学の考察」（『印度学仏教学研究』 第十八卷第一号 一九六九年）

東隆眞「三代相論考」（『宗学研究』 第十一〜十五号 一九六九〜七三年）

東隆眞『瑩山禅師の研究』（一九七四年 春秋社）

東隆眞『太祖瑩山禅師』（一九九六年 国書刊行会）

東隆眞編『徹通義介禅師研究』（二〇〇六年 大法輪閣）

網野善彦『蒙古襲来』（一九七四年 小学館）

荒川紘『日本人の宇宙観』（二〇〇一年 紀伊国屋書店）

安藤嘉則「中世禅宗における幻住派の密参禅について」（『印度学仏教学研究』 第五三卷第二号 二〇〇二年）

安藤嘉則「中世臨済宗幻住派の公案禅」（『日本文化研究』 第四号 二〇〇二年）

家永三郎「親鸞の宗教の成立に関する思想的考察」（『中世仏教思想史研究』 一九四七年 法蔵館）

池田魯参『宝慶記 道元の入宋求法ノート』（一九八九年 大東出版社）

- 石井公成 「仏教史のなかの今昔物語集」(小峯和明編『今昔物語集を読む』二〇〇八年 吉川弘文館)
- 石川純一郎 『地蔵の世界』(一九九五年 時事通信社)
- 石川力山 「寂円派研究序説」(河村孝道・石川力山編『道元』一九八三年 吉川弘文館) \*初出は一九七七年
- 石川力山 「中世仏教における菩薩思想―特に曹洞宗における地蔵菩薩信仰を中心として―」(『日本仏教学会年報』第五一号 一九八五年)
- 石川力山 「三代相論再考」(『宗学研究』第三一号 一九八九年)
- 石田一良 『浄土教美術』(一九九一年 ペリかん社)
- 石田充之 『日本浄土教の研究』(一九五二年 百華宛)
- 石田吉貞 『藤原定家の研究』(一九七五年 文雅堂銀行研究社)
- 磯村有紀子 「中世の京都と六地蔵」(『滋賀県史学会誌』第八号 一九九四年)
- 板垣俊一 『江戸期視覚文化の創造と歴史的展開』(二〇一二年 三弥井書店)
- 板倉義之 「(霊は清らかに見えねども―中岡俊哉の心靈写真という常識)」(一柳廣孝編『オカルトの帝国』二〇〇六年 青弓社)
- 板橋区教育委員会社会教育課文化財係編 『石仏』(一九九五年)
- 伊東尚一 『金津町史』(一九五三年 金津町教育委員会事務局)
- 伊藤唯真 「開創伝承からみたる遊行念仏聖の定着」(『聖仏教史の研究 下』一九九五年 法蔵館)
- 井上光貞 『新訂 日本浄土教成立史の研究』(一九七五年 山川出版社) \*旧版は一九五六年刊
- 今井昭彦 『近代日本と戦死者祭祀』(二〇〇五年 東洋書林)
- 今井雅晴 「時宗と地蔵信仰」(和歌森太郎編『日本文化史の提言』一九七五年 弘文堂)
- 今枝愛真 『中世禅宗史の研究』(一九七〇年 東京大学出版会)
- 今枝愛真 「瑩山禅師の歴史的位置―白山天台との関連を中心として―」(瑩山禅師奉讃刊行会『瑩山禅師研究』一九七四年)

- 今村充夫「地蔵信仰の一側面」(『加能史料研究』第二六号 一九九五年)
- 岩崎武夫『さんせう太夫考』(一九七三年 平凡社)
- 岩崎武夫「金焼地蔵―代受苦の諸相」(『続さんせう太夫考』一九七八年 平凡社)
- 岩崎正純「中世箱根地方における地蔵信仰の展開」(『箱根町文化財紀要』第八号 一九七七年)
- 岩崎正純「箱根町における宗教諸宗派の歴史的変遷」(『箱根の文化財』第十六号 一九八一年)
- 岩本裕『極楽と地獄』(一九六五年 三一書房)
- 植木行宣『風流踊とその展開』(二〇一〇年 岩田書院)
- 植島基行「十三仏成立への展開」(『密教文化』第九四号 一九七〇年)
- 上田さち子「叡尊と大和の西大寺末寺」(大阪歴史学会編『中世社会の成立と展開』一九七六年 吉川弘文館)
- 上田さち子「西大寺叡尊伝の問題点」(『社会科学論集』第四・五号 一九七三年)
- 上田靈城「近世真言宗の庶民教化」(『密教文化』第九九号 一九七二年)
- 上田靈城「鎌倉仏教における戒律化」森章司編『戒律の世界』一九九三年 溪水社)
- 臼井信義『足利義満』(一九六〇年 吉川弘文館)
- 歌川学「空也と平安仏教」(『日本歴史』第六一号 一九五三年)
- 内山純子『中世常陸国天台宗の高僧の足跡』(一九九六年 茨城県魯郷土文化顕彰会)
- 内山純子『東国における仏教諸宗派の展開』(一九九〇年 そしえて)
- 内山節『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』(二〇〇七年 講談社現代新書)
- 梅津次郎「常謹撰「地蔵菩薩応驗記」公刊に際して」(『大和文化研究』第一〇〇号 一九六六年)
- 梅津次郎『絵巻物叢考』(一九六八年 中央公論美術出版)
- 梅津次郎「地蔵験記絵巻 法然寺本」(『絵巻物残欠の譜』一九七〇年 角川書店)

- 永平寺史編纂委員会『永平寺史 上巻』（一九八二年 永平寺）
- 衛藤即応『宗祖としての道元』（岩波書店 一九四四年）
- 追塩千尋「忍性の宗教活動について」（『仏教史学研究』第二二卷第二号 一九八〇年）
- 追塩千尋『中世南都の仏教』（一九九五年 吉川弘文館）
- 追塩千尋『国分寺の中世的展開』（一九九六年 吉川弘文館）
- 追塩千尋「勸進聖としての栄西」（『年報 新人文学』第一号 二〇〇五年）
- 追塩千尋「『今昔物語集』本朝部の神について」（速水侑編『日本社会における仏と神』二〇〇六年 吉川弘文館）
- 大串純夫『来迎芸術』（一九八三年 法蔵館）
- 大島建彦『道祖神と地蔵』（一九九二年 三弥井書店）
- 大島建彦「市有地の地藏像」（『西郊民俗』第一九五号 二〇〇六年↓『民俗伝承の現在』二〇一一年 三弥井書店に所収）
- 大隅好『盲人の生活』（一九九八年 雄山閣）
- 太田久紀『仏典講座 観心覚夢鈔』（一九八一年 大蔵出版）
- 大谷旭雄「法然上人における逆修について」（佐藤密雄博士古希記念論文集刊行会編『仏教思想論叢』一九七二年 山喜房）
- 大谷哲夫「曹洞宗（2）」田中良昭『禅学研究入門』（一九九四年 大東出版社）
- 大橋俊雄『時宗の成立と展開』（一九七三年 吉川弘文館）
- 大橋俊雄『一遍と時宗教団』（一九七八年 教育社）
- 大橋俊雄『法然入門』（一九八九年 春秋社）
- 大橋俊雄「蓮如上人と一向衆」（蓮如上人研究会『蓮如上人研究』一九九八年 思文閣）
- 大森恵子「但馬地方の地藏盆行事と愛宕信仰」（『年中行事と民俗芸能』一九九八年 岩田書院）
- 大森志郎「間引・縁女・水子塚」（『東京女子大学論集』第三卷第二号 一九五三年）

- 岡崎讓治『浄土教画』（一九六九年 至文堂）
- 小笠原由起夫「道元を知る小事典」（山折哲雄監修『道元の世界』佼成出版社 一九九一年）
- 岡部伊都子『京の地蔵紳士録』（一九八四年 淡交社）
- 岡本況齋「今昔物語出典攷」（室松岩雄『国文註釈全書 物語十二種』一九一〇年 國學院大學出版部）
- 小倉泰「地獄と地蔵菩薩―古代インドから平安朝まで―」（『ユーラシア』新二号 一九八五年）
- 小栗栖健治『熊野勸心十界曼荼羅』（二〇一一年 岩田書院）
- 影山純夫「慈愛と追慕 童子肖像画について」（『古美術』第八六号 一九八八年）
- 梶谷亮治「日本における十王図の展開」（『仏教芸術』第九七号 一九七四年）
- 梶村昇・福原隆善『弁長・隆寛』（一九九二年 講談社）
- 片山一男『骨が語る日本人の歴史』（二〇一五年 ちくま新書）
- 片山清「安芸国佐木島割石地蔵―正安二年銘摩崖仏―」（『史迹と美術』第三一四号 一九六一年）
- 香月乗光<sup>かつき</sup>「重源の浄土五祖像将来について」（『印度学仏教学研究』第十八卷第二号 一九七〇年）
- 葛飾区教育委員会『かつしかの道―水戸佐倉道―』（一九九〇年）
- 葛飾区教育委員会『かつしかの道―岩槻慈恩道―』（一九九一年）
- 葛飾区教育委員会『かつしかのみちしるべ』（一九九五年）
- 勝田至「鳥辺野考」（『日本の墓と葬送』二〇〇六年 吉川弘文館）
- 勝田至編『日本葬制史』（二〇一二年 吉川弘文館）
- 加藤理『駄菓子屋・読み物と子どもの近代』（二〇〇〇年 青弓社）
- 加藤純二『未成年者禁酒法を作った人 根本正 伝』（一九九五年 銀河書房）
- 加藤康昭「近世村落共同体における盲人の存在形態」（『日本盲人社会史の研究』一九七四年 未来社）

- 角川源義『角川源義全集 第二卷』(一九八七年 角川書店)
- 金井清光「物狂いの狂言から狂言劇」(『能と狂言』一九七七年 明治書院)
- 金井清光『時衆教団の地方展開』(一九八三年 東京美術)
- 金沢市地蔵尊調査委員会『金沢市の地蔵尊』(一九九七年 横浜記念金沢の文化創生財団)
- 金子浩之「江戸城石垣石丁場関連遺跡」(『月刊文化財』第五四八号 二〇〇九年)
- 神子上恵龍『改訂教行信証概観』(永田文昌堂 一九五二年)
- 神谷満雄『鈴木正三』(二〇〇一年 PHP)
- 苅米一志『莊園社会における宗教構造』(二〇〇四年 校倉書房)
- 河合正治「西大寺流律宗の伝播―瀬戸内海地域を中心として―」(『金沢文庫研究』第一四八号 一九六八年)
- 川内彩友美『まんが日本昔ばなし今むかし』(二〇一四年 展望社)
- 川崎ミチ子「敦煌本八地蔵菩薩経Vについて」(『東洋学研叢』第三九号 二〇〇二年)
- 川添登「巢鴨とげぬき地蔵(万頂山高岩寺)の変容と発展」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第三三三号 一九九一年)
- 川添登編『おばあちゃんの原宿』(一九八九年 平凡社)
- 川村邦光『地獄めぐり』(二〇〇〇年 ちくま新書)
- 菊池宏一郎「極楽へ導く地蔵」(『日本思想史研究』第四〇号 二〇〇八年)
- 菊地章太「フランソワーズ・ワン||トウタン―地蔵信仰の原風景」(『東方』第二二八号 二〇〇〇年)
- 北畠典生『『信願上人小章』の研究』(一九八七年 永田文昌堂)
- 北川 智海『壬生大念仏の起因を明かす』(一九三五年 壬生寺事務所)
- 北原糸子『江戸の城づくり』(二〇一二年 ちくま学芸文庫) \*初出一九九九年
- 木村清孝「『延命地蔵経』の成立」(北畠典生博士古希記念論文集刊行会編『日本佛教文化論叢 上巻』一九九八年 永田文昌堂)

- 京都市『京都の歴史 8』（一九七五年 学芸書林）
- 京都市文化市民局「京の地蔵盆」（二〇一五年二月二二日開催「お地蔵さまサミット」配付史料）
- 京都の「地蔵」信仰と地蔵盆を活かした地域活性化事業実行委員会編『京都の「地蔵」信仰を活かした地域活性化事業報告書』（二〇一四年）
- 霧林宏道「縁起の生成についての一考察―岩船山地蔵縁起を中心に―」（『野州国文学』第五二号 一九九三年）
- 久保尚文「立山地獄信仰論のために」（『越中中世史の研究』（一九八三年 桂書房）
- 倉沢進編『大都市高齢者と盛り場』（一九九三年 日本評論社）
- 黒田智「勝軍地蔵と「日輪御影」（『中世肖像の文化史』二〇〇七年 ぺりかん社）
- 黒田智「加能越の勝軍地蔵」（『日本仏教総合研究』第十二号 二〇一四年）
- 黒田俊雄『寺社勢力』（一九八〇年 岩波新書）
- 黒田俊雄『日本中世の国家と宗教』（一九七五年 岩波書店）
- 黒田俊雄『日本中世の社会と宗教』（一九九〇年 岩波書店）
- 黒田日出男『姿としぐさの中世史』（一九八六年 平凡社）
- 黒田日出男「「童」と「翁」』『境界の中世 象徴の中世』（一九八六年 東京大学出版会）
- 黒田日出男「戦国期の民衆文化」（『岩波講座 日本通史 第10巻 中世4』一九九四年 岩波書店）
- 黒田日出男『絵巻 子どもの登場』（一九九八年 河出書房新社）
- 高達奈緒美「一四卷本地蔵菩薩靈驗記解説」（榎本千賀・他編『一四卷本地蔵菩薩靈驗記（下）』二〇〇三年 三弥井書店）
- 江東区教育委員会『江東区の民俗 城東編』（二〇〇一年）
- 小西瑛子「地蔵菩薩靈驗記」について」（『仏教民俗』第五号 一九七二年）
- 小花波平六「庚申のまつり方の地方展開」（同編『庚申信仰』一九八八年 雄山閣）

- 小林太市郎「唐代の救苦観音」(『研究 哲学篇』第六号 一九五五年)
- 小林忠雄『金沢、まちの記憶 五感の記憶』(二〇〇九年 能登印刷)
- 小林真由美「中有と冥界」(『日本靈異記の仏教思想』二〇一四年 青簡社)
- 五来重『高野聖』(一九七五年 角川書店)
- 五来重『民間芸能史』(二〇〇八年 法蔵館)
- 小山聡子「中世前期における童子信仰の隆盛と末法思想」(『仏教史学研究』第四三卷第一号 二〇〇〇年)
- 小山聡子『護法童子信仰の研究』(二〇〇三年 自照社)
- 近藤敬吾「山崎闇斎と庚申」(『神道宗教』第一五〇号 二〇〇七年)
- 西郷信綱「黄泉の国と根の国」『古代人と夢』(一九九三年 平凡社)
- 斉藤研一『子どもの中世史』(二〇〇三年 吉川弘文館)
- 斎藤隆信・西本照真「民衆仏教の系譜」(沖本克己編『興隆・発展する仏教』二〇一〇年 佼成出版社)
- 佐伯弘次「中世の沓岐安国寺」(中尾堯編『中世の寺院体制と社会』二〇〇二年 吉川弘文館)
- 坂井衡平『今昔物語集の新研究』(一九二三年 誠之堂書店)
- 坂内龍雄「曹洞宗における密教の受容」(『密教学研究』第七号 一九七五年)
- 坂上雅翁「南都浄土教と良遍上人の教学」(良忠上人研究会『良忠上人研究』一九八六年 光明寺)
- 坂詰秀一「江戸に於ける伊豆石の世界」(『石造文化財』第三号 二〇一一年)
- 桜井徳太郎「本邦シャマニズムの変質過程―とくに地藏信仰との習合について―」(同編『地藏信仰』(一九八三年 雄山閣) \*初出  
一九七〇年
- 桜井徳太郎「古代郷土生活の民俗学―シャマニズムよりの追究―」(『郷土史研究講座』 一九七〇年 朝倉書店)
- 佐々木聡・他「旧・白峰村の板碑・石仏」(『比較思想研究』第三二号別冊 二〇〇五年)

- 佐々木潤之助「寛永飢饉について」(『民衆史を学ぶということ』二〇〇六年 吉川弘文館) \*初出二〇〇〇年
- 佐藤悦成『総持二世 峨山禅師』(一九九六年 大本山総持寺)
- 佐藤弘夫『日本中世の国家と仏教』(一九八七年 吉川弘文館)
- 佐藤弘夫『アマテラスの変貌』(二〇〇〇年 法蔵館)
- 佐藤正英『歎異抄論釈』(二〇〇五年 青土社) \*『歎異抄論註』一九八九年の改訂増補
- 里内徹之「日本浄土教成立前史に於ける念仏集団について」(『竜谷史壇』第三六号 一九五二年)
- 佐野精一『京の石仏』(一九七八年 サンプルライト出版)
- 佐橋法龍『日本曹洞宗史論』(一九五二年 禅宗史学研究会)
- 寒川恒夫「鬼ごっこ「比々女」の起源に関する民族学的研究」(『遊びの歴史民族学』二〇〇三年 明和書房)
- 佐脇貞明「貞慶の観音信仰と覚真」(『龍谷史壇』第四二号 一九六七年)
- ジェラルド・グローマー『瞽女うた』(二〇一四年 岩波新書)
- 志田原重人「草戸千軒にみる中世民衆の世界」(網野善彦・石井進編『中世の風景を読む』一九九五年 新人物往来社)
- 静永賢道「良遍と良忠上人」(良忠上人研究会『良忠上人研究』一九八六年 光明寺)
- 品川区教育委員会『しながわの史跡めぐり』(一九九七年)
- 柴田泰「中国浄土教の発展」(『講座・大乘仏教5』一九八五年 春秋社)
- 島田健太郎「良遍の唯識観の特異性」(『学習院大学文学部年報』第三八輯 一九九一年)
- 志水和夫『大予言の嘘』(一九九一年 データハウス)
- 清水邦彦「『地蔵菩薩心験記』の基礎的研究」(『日本文化研究』第三号 一九九二年)
- 清水邦彦「地蔵専修について」(『倫理学』第十号 一九九二年)
- 清水邦彦「法然浄土教における地蔵誹謗」(『日本思想史学』第二五号 一九九三年)

- 清水邦彦 「地蔵の名字・再考」(『北陸宗教文化』第十二号 二〇〇〇年)
- 清水邦彦 「水子供養の起源を求めて」(『宗教研究』第三二七号 二〇〇一年)
- 清水邦彦 「F.Tountain 著『五十三世紀の中国地蔵信仰』」(『宗教研究』第三三五号 二〇〇三年)
- 清水邦彦 「地蔵が子どもの姿を取ることについて」(『北陸宗教文化』第十七号 二〇〇五年)
- 清水邦彦 「『地蔵菩薩靈驗記』再考」(『日本仏教総合研究』第二号 二〇〇四年)
- 清水邦彦 「日本中世における地蔵信仰受容」(『倫理学』第二四号 二〇〇八年)
- 清水邦彦 「中世曹洞宗の展開」(『北陸宗教文化』第二〇号 二〇〇八年)
- 清水邦彦 「奈良県奈良市市街地の地蔵盆」(『西郊民俗』第二二四号 二〇一三年)
- 清水真澄 『中世彫刻史の研究』(一九八八年 有隣堂)
- 清水宥聖 『観音利益集 小考』(『国文学踏査』第十三号 一九八四年)
- 首藤善樹 「勝軍地蔵信仰の成立と展開」(『龍谷大学大学院紀要』第一号 一九七九年)
- 水藤真 『中世の葬送・墓制』(一九九一年 吉川弘文館)
- 末木文美士 『鎌倉仏教形成論』(一九九八年 法蔵館)
- 菅原征子 「平安末期における地蔵信仰」(桜井徳太郎編『地蔵信仰』一九八三年 雄山閣) \*初出は一九六六年↓菅原『日本古代の民間信仰』(二〇〇三年 吉川弘文館)に再録
- 菅原征子 「平安末期における布教者と民衆との対話」(日本宗教史研究会編『布教者と民衆との対話』一九六八年 法蔵館)
- 菅原征子 「平安末期の地蔵信仰再考」(佐々木宏幹編『民俗学の地平』二〇〇七年 岩田書院)
- 杉岡厚誌 「日本靈異記」における地獄説話と地蔵」(『仏教民俗研究』第四号 一九八〇年)
- 杉並区教育委員会 『杉並の石仏と石塔』(一九九一年)
- 杉本卓洲 「胎児と生苦」(『五戒の周辺』一九九九年 平楽寺書店)

- 杉本友美 「『延命地藏経聞書』をめぐって」(『仏教文学』第二〇号 一九九六年)
- 杉山友美 「玉川大学図書館蔵『地藏菩薩壹万體縁起』」(『実践国文学』第五二号 一九九七年)
- 杉山友美 「叡山文庫蔵『地藏菩薩一万体印行縁起』二種」(『実践国文学』第五三号 一九九八年)
- 鈴木敬 「陸信忠筆 十王図」(『金沢文庫研究』一三六号 一九六七年)
- 鈴木俊夫編 『東京都江戸初期の庚申塔』(一九九九年)
- 鈴木理生 「災害と江戸城」(『江戸と城下町』一九七六年 新人物往来社)
- 鈴木由利子 「水子供養にみる生命観の変遷」(『女性と経験』第三四号 二〇〇九年)
- 須藤眞志 「日米交渉にみる民間人外交の限界」(『日米開戦外交の研究』一九八六年 慶應通信)
- 砂川博 「一遍と地藏信仰」(『一遍聖絵の研究』二〇〇三年 岩田書院)
- 諏訪春雄 「幽霊・妖怪の図像学」(小松和彦編『日本妖怪学大全』二〇〇三年 小学館)
- 清泉女学院郷土研究部 「地藏を求めて 鎌倉二十四所地藏尊の研究」(『鎌倉』第二五号 一九七五年)
- 関靖識 『金沢文庫の研究』(一九五一年 講談社)
- 関戸堯海 「救いの構造」(佐々木馨編『日蓮』二〇〇四年 吉川弘文館)
- 関山和夫 『話芸の系譜』(一九七三年 創元社)
- 関山和夫 『説教の歴史』(一九七八年 岩波新書)
- 関山和夫 「地獄絵の絵解き」(林雅彦編『絵解き万華鏡』一九九三年 三一書房)
- 大東俊一 「京都の「六地藏めぐり」について」(『人間総合科学大学紀要』第二四号 二〇一三年)
- 平雅行 『日本中世の社会と仏教』(一九九二年 塙書房)
- 平雅行 「専修念仏の弾圧をめぐって」(『仏教史学研究』第五六卷第一号 二〇一三年)
- 平裕史 「寺名より見た浄土宗一般寺院の前生」(『法然伝承と民間寺院の研究』二〇一一年 思文閣)

- 多賀宗集 「栄西僧正の一著作は『地不の決』と同本歟」(『日本歴史』第一二五号 一九五八年十一月)
- 多賀宗集 『栄西』(一九六五年 吉川弘文館)
- 高井悌三郎 「常陸 東城寺・般若寺結界石」(『史迹と美術』第三一七号 一九六一年)
- 高井悌三郎 「茨城県筑波郡三村山地蔵石龕」(『日本考古学年報』第五号 一九五二年)
- 高井悌三郎 「常陸小田 三村山結界石」(『史迹と美術』第二八三号 一九五五年)
- 高井悌三郎 「常陸国三村寺湯地蔵石龕」(『史迹と美術』第三二三号 一九六二年)
- 高木豊 「日蓮と日蓮宗教団の形成」(中村元・他編集『アジア仏教史 鎌倉仏教3 地方 武士と題目』一九七二年 佼成出版社)
- 鷹巢純 『十王讚嘆鈔』系諸本と六道十王図(『東海仏教』第四二号 一九九七年)
- 鷹巢純 「悪道の母子」(立川武蔵編『曼荼羅と輪廻』一九九三年 佼成出版社)
- 高野修 「中世北信濃における時衆の展開と遊行二十一代知蓮上人と永正地蔵尊」(『時宗教学年報』第三六号 二〇〇八年)
- 高橋貢 「『地蔵菩薩靈驗記』成立の一背景」(『中古説話文学研究』一九七四年 桜楓社)
- 多川俊英 『貞慶』『愚迷発心集』を読む(二〇〇四年 春秋社)
- 高橋昌明 「境界の祭祀」(網野善彦・他『日本の社会史』一九八七年 岩波書店)
- 滝本靖士 「富山県・石川県の道祖神」(『北陸石仏の会研究紀要』第一号 一九九六年)
- 竹内俊則 『新版 京のお地蔵さん』(二〇〇五年 京都新聞社)
- 竹内道雄 『日本の禅』(一九七六年 春秋社)
- 竹内宏 『とげぬき地蔵商店街の経済学』(二〇〇五年 日本経済新聞社) \*二〇〇一年版の修正加筆
- 武田和昭 「十三仏図の成立について」(『密教文化』第一六九号 一九八九年)
- 竹村牧男 「道元の修証論」(今井雅晴編『中世仏教の展開とその基盤』二〇〇二年 大蔵出版)
- 竹村牧男 「日本仏教 導入期から江戸時代まで」(菅沼晃博士古希記念論文集刊行会編『インド哲学仏教学への誘い』二〇〇五年 大

東出版社)

田中元『古代日本人の世界』(一九七四年 吉川弘文館)

田中志敬「京都の地域コミュニティと地域運営」(鯉坂学・小松秀雄編『京都の「まち」の社会学』二〇〇八年 世界思想社)

田中敏子「江戸時代の極楽寺地藏堂について」(『鎌倉』第二〇号 一九七一年)

\*民俗学の田中久夫

田中久夫「地藏信仰の伝播者の問題」(桜井徳太郎編『地藏信仰』一九八三年 雄山閣) \*初出は一九七二年

田中久夫「地藏信仰・盲僧・小野氏」(『近畿の民間信仰』一九七三年 明玄書房)

田中久夫「地藏信仰と平清盛」(『仏教民俗と祖先祭祀』一九八六年 神戸大学東西文化研究所)

田中久夫「地藏信仰と民俗」(五来重・他編『仏教民俗学』一九八〇年 弘文堂)

田中久夫『地藏信仰と民俗』(一九八九年 木耳社)

\*仏教学者の田中久夫

田中久夫「著作者略伝」(日本思想大系『鎌倉新仏教』一九七一年 岩波書店)

田中久夫『鎌倉仏教』(一九八〇年 教育社歴史新書)

田中悠文「京都における地藏菩薩信仰をめぐる」(『現代密教』第二一号 二〇一〇年)

田中緑紅『京のお地藏さん(上・下巻)』(一九五八・七二年 緑紅叢書)

田中緑紅『壬生大念仏狂言』(一九五四年 花發行所)

田野登「都会の地藏さんのフォークロア」(『歴史手帖』第一六卷第一〜一二号 一九八八年)

田野登『大阪の地藏』(一九九四年 北辰堂)

玉山成元『中世浄土宗教団史の研究』(一九八〇年 山喜房)

玉村竹二「日本中世禅林に於ける臨済・曹洞両宗の異動」(石川力山編『禅とその歴史』一九九九年 ぺりかん社) \*初出一九五〇

年

- 圭室諦成『葬式仏教』（一九六三年 大法輪閣）
- 圭室諦成「中世後期仏教の研究」（『明治大学人文科学研究所紀要』第一号 一九六二年）
- 圭室諦成「治病宗教の系譜―中世後期を中心として」（『日本歴史』一九六三年十一月号）
- 圭室諦成『日本仏教史概説』（一九七四年 隆文館）
- 圭室文雄「幕藩制成立期の仏教」（『日本仏教史 近世』一九八三年 吉川弘文館）
- 田村円澄『日本仏教史 別巻 法然上人伝』（一九八三年 法蔵館）
- 近石哲「地藏盆行事にみる地域の特徴」（『比較民俗研究』第二七号 二〇一二年）
- 築田哲雄「親鸞の神祇に対する態度」（『印度学仏教学研究』第三八号第一号 一九八九年）
- 千葉乗隆「解題」（『真宗史料集成』第五卷 一九七九年 同朋舎）
- 中日新聞社編『お地藏さん見つけた』（二〇〇一年 中日新聞社）
- 塚田晃信「蓮体の鑽石集」（『文学論藻』第五二号 一九七七年）
- 塚本善隆『支那仏教史・北魏篇』（一九四二年 弘文堂）
- 塚本善隆「引路菩薩信仰に就いて」（『東方学報（京都）』第一号 一九三一年）
- 辻善之助『日本仏教史 第四卷 中世篇之三』（一九四九年 岩波書店）
- 堤邦彦「仏教長編説話『勸化西院河原口号伝』（『近世仏教説話の研究』一九九六年 翰林書房）
- 堤禎子「中世地藏信仰のトポス（上・下）」（『月刊百科』第三五五・三五六号 一九九二年）
- 坪井俊映「法然浄土教における一向専修の形成について（2）」（『印度学仏教学研究』第二〇卷第二号 一九七二年）
- 坪井俊映『法然浄土教の研究』（一九八二年 隆文館）
- 東京都葛飾区教育委員会『葛飾区石仏調査報告』（一九八二年）

- 東京都葛飾区教育委員会『葛飾区金石文調査報告』（一九八七年）
- 東京都葛飾区教育委員会『かつしかの道 総合調査報告書』（一九九三年）
- 東京都北区教育委員会『東京都北区庚申信仰関係石造物調査報告書』（一九九六年）
- 東京都江東区総務部広報課『古老が語る江東区の祭りと縁日』（一九八七年）
- 東京都渋谷区教育委員会『渋谷区の文化財 石仏・金石文編』（一九七七年）
- 東京都世田谷区教育委員会『地蔵および諸尊』（一九八五年）
- 東京都中野区教育委員会『東京都中野区内の石仏』（一九六八年）
- 藤堂恭俊「浄土宗開創前後における法然の課題をめぐって」（『仏教文化研究』第十七号 一九七一年）
- 徳江元正「桔梗姫の唱導」（『國學院雜誌』第六二卷第十二号 一九六一年）
- 豊島区立郷土資料館『女性の祈り』（一九九三年）
- 利光有紀「京都のお地藏さま」（『季刊民族学』第五三号 一九九〇年）
- 殿畑外義「『地藏菩薩心験新記』と普門元照」（『市民大学院論文集』第二号 二〇〇七年）
- 富貴原章信「解脱上人とその念仏」（日本仏教学会編『鎌倉仏教形成の問題点』一九六九年 平楽寺書店）
- 富永航平『一遍上人と遊行の寺』（一九八八年 朱鷺書房）
- 苗治帥「人が集まる「場所」に関する研究」（『流通経済大学大学院社会学研究科論集』第十六号 二〇〇九年）
- 永井義憲「唱導の文学」（佐藤謙三編『今昔物語』一九五八年 角川書店）
- 中尾堯「仏教の庶民化と葬祭」（日本宗教史研究会編『布教者と民衆との対話』一九六八年 法蔵館）
- 中尾堯「日蓮宗と現世利益」（日本仏教研究会編『日本宗教の現世利益』一九七〇年 大蔵出版社）
- 中尾堯「関東日蓮教団の展開」（影山雄編『中世法華仏教の展開』一九七四年 平楽寺書店）
- 中尾良信「道元の戒律観と「没後作僧」」（『禅学研究』第八〇号 二〇〇一年）

- 長尾智子・他「近代京都における地蔵安置の変遷」(『平成14年度日本建築学会近畿支部研究報告集』二〇〇二年)
- 長沢利明「地蔵と方角」(『東京の民間信仰』一九八九年 三弥井書店)
- 長沢利明「地蔵は燃える、人々の願いを背負って」(『望星』第四一巻第八号 二〇一〇年)
- 永島福太郎「中世律宗の活動」(『日本歴史』第二四八号 一九六九年)
- 長友千代治『近世貸本屋の研究』(一九八二年 東京堂)
- 中野豈任『忘れられた霊場』(一九八八年 平凡社)
- 長野浩典『生類供養と日本人』(二〇一五年 弦書房)
- 中ノ堂一信「中世の勸進と三昧聖」(『中世勸進の研究』二〇一二年 法蔵館 \*初出一九八〇年)
- 中村元「悩める人々への奉仕―忍性の社会活動―」(『日本宗教の近代性 中村元選集 第八巻』一九六一年 春秋社)
- 中根富三郎『愛知県東海市内 石仏地蔵をたずねて』(二〇〇三年 文芸社)
- 中野照男『閻魔・十王像』(一九九二年 至文堂)
- 中野区教育委員会『路傍の石仏をたずねて』(一九七六年)
- 奈良博順「悪人正機説をめぐって」(淑徳論叢刊行会『石井俊瑞先生喜寿記念論文集』一九七一年 淑徳論叢刊行会)
- 奈良博順「法然の回心について」(『倫理学』第五号 一九八七年)
- 二階堂善弘「日中の地蔵菩薩の差異と文化交渉」(『アジアの民間信仰と文化交渉』二〇一二年 関西大学出版部)
- 西義雄「地蔵菩薩の源流思想の研究」(同編『大乘菩薩道の研究』平楽寺書店 一九六八年)
- 西田耕三「ある僧の軌跡」(『近世の僧と文学』二〇一〇年 ペリかん社)
- 西田耕三「解題」『仏教説話集成「一」』(一九九〇年 国書刊行会)
- 西島孜哉「出版禁令と書肆・作者―『礪石集』を題材として」(『鳴尾説林』第四号 一九九六年)
- 西野光一「福岡県における享保の飢饉と救済信仰」(『仏教文化学会紀要』第十五号 二〇〇七年)

- 西宮市立郷土資料館『西宮の地蔵』（二〇一三年 西宮市教育委員会）
- 西山厚「講式から見た貞慶の信仰」（中世寺院史研究会編『中世寺院史の研究（下）』一九八八年 法蔵館）
- 西山美香「足利義満の△宝蔵▽としての宝幡寺鹿王院」（松岡心平・小川剛生『ZEAMI 中世の芸術と文化04』二〇〇四年）
- 西村玲「中世における法相の禅受容―貞慶から良遍へ、日本唯識の跳躍」（『日本思想史研究』第三一号 一九九九年）
- 練馬区郷土資料室社会教育課文化財保護係『練馬の石造物―路傍編 その一・二』（一九九一・九二年 練馬区教育委員会）
- 納富常夫「真言僧忍性」（『日本歴史』第四七九号 一九八八年 四月）
- 野中和之「伊豆の石丁場」（同編『石垣が語る江戸城』二〇〇七年 同成社）
- 野村隆「伊派遣品の傾向と大蔵派宝篋印塔」（『史跡と美術』第五一九号 一九八一年）
- 野村卓美「解脱房貞慶と地蔵信仰」（『文藝論叢』第七二号 二〇〇九年）
- 野村八良『近古時代説話文学論』（一九三五年 明治書院）
- 芳賀矢一『攷証今昔物語集』（一九一三年 富山房）
- 長谷部英一「中国における胎教」（『技術マネジメント研究』第四号 二〇〇二年）
- 服部清道『板碑概説』（一九七二年 角川書店）＊一九三三年版の再版
- 葉貫磨哉「鎌倉仏教に於ける栄西門流の位置」（『仏教史学研究』第二十卷第二号 一九六五年）
- 葉貫磨哉『中世禅林成立史の研究』（一九九三年 吉川弘文館）
- 浜中寛純『京都「六地藏巡り」の栞』（一九三二年 竜門春秋会）
- 林英一『地蔵盆』（一九九七年 初芝文庫）
- 林英一「明治政府の近代化政策と地蔵盆」（『日本民俗学』第二二五号 二〇〇八年）
- 林幹彌「鎌倉時代の太子信仰」（『太子信仰』一九七二年 評論社）
- 林屋辰三郎・藤岡謙二郎編『宇治市史・2』（一九七四年 宇治市）

- 速水侑 「日本古代貴族社会における地藏信仰」(桜井徳太郎編『地藏信仰 \*初出一九六九年)
- 速水侑 『観音信仰』(一九七〇年 塙書房)
- 速水侑 『弥勒信仰』(一九七一年 評論社)
- 速水侑 『平安貴族社会と仏教』(一九七五年 吉川弘文館)
- 速水侑 『地藏信仰』(一九七五年 塙書房)
- 速水侑 『浄土信仰論』(一九七八年 雄山閣)
- 速水侑 『観音・地藏・不動』(一九九九年 講談社)
- 原田弘道 「中世における幻住派の形成と展開」(『駒澤大学仏教学部研究紀要』第五三号 一九九五年)
- 原田正敏 「禅宗史を見直す」(大久保良峻・他編著『日本仏教34の謎』二〇〇三年 春秋社)
- 福井康順 「選択集新義」『福井康順著作集 第六卷 日本中世思想研究』一九八八年 法蔵館に所収) \*初出は一九六二年・但し、所収に当たり、若干改題されている。
- 樋口誠太郎 「中世における武家の「軍神」信仰」(『千葉県中央博物館研究報告』第二号 一九九〇年)
- 久野芳子 「浄土真宗における神祇観の発展」(石田一良編『日本精神史』ぺりかん社 一九八八年)
- 兵藤裕己 「琵琶法師・市・時衆」(武田佐知子編『一遍聖絵を読み解く』一九九九年 吉川弘文館)
- 兵藤裕己 『琵琶法師』(二〇〇九年 岩波新書)
- 平井正戒 『隆寛律師の浄土教』(一九四一年 金沢文庫浄土宗典研究会)
- 平岡定海 『日本彌勒浄土思想展開史の研究』(一九七七年 大蔵出版)
- 平川彰 「浄土思想の成立」『講座・大乘仏教5―浄土思想』(一九八五年 春秋社)
- 平野実 『庚申信仰』(一九六九年 角川選書)
- 広神清 「鎌倉浄土教の神祇観」(『思想』一九七七年三月号)

- 広神清 「鎌倉・室町期の浄土教と運命観」(『季刊日本思想史』第三二号 一九八九年)  
 広神清 「神道理論の成立と神仏習合論争」(今井淳・小沢富夫編『日本思想論争史』一九七九年 ぺりかん社)  
 廣川堯敏 「法然教学における廃立の構造」(知恩院浄土宗宗学研究所編『法然仏教の研究』一九七五年 山喜房)  
 広瀬良弘 「中世後期における禅僧と禅寺と地域社会」(『歴史学研究』一九八一年別冊)  
 広瀬良弘 『禅宗地方展開史の研究』(一九八八年 吉川弘文館)  
 廣田哲通 「乃至童子戯れに」考―事実と説話と経文と」(『女子大文学 国文編』第三五号 一九八四年)  
 福島公彦 「沙石集、雑談集と地藏菩薩靈驗記」(『中世文学論叢』第一号 一九七六年)  
 福永勝美 『親鸞教団弾圧史』(一九九五年 雄山閣)  
 藤吉慈海 「法然と道元」(『講座道元 第6巻』一九八〇年 春秋社)  
 古田紹欽 「日本禅宗史―臨済宗―」(西谷啓治編『講座禅 第四巻―日本―』一九六七年 筑摩書房)  
 古田紹欽 「永平教団における寂円派について」(『古田紹欽著作集 第二巻 禅宗史研究』一九八一年) \*初出は一九七二年  
 細川涼一 『中世の律宗寺院と民衆』(一九八七年 吉川弘文館)  
 細川涼一 「忍性の生涯」(松尾剛次編『叡尊・忍性』二〇〇四年 吉川弘文館)  
 堀池春峰 『南都仏教史の研究(下)』(一九八二年 法蔵館)  
 堀池春峰 「知足院地藏菩薩」(『東大寺史のいざない』二〇〇四年 昭和堂) \*初出は一九七七年  
 前川健一 「新仏教の形成」(末木文美士編『躍動する中世仏教』二〇一〇年 佼成出版社)  
 松尾剛次 「結界の作用」(『日本歴史』一九九二年十一月号)  
 松尾剛次 『中世都市鎌倉の風景』(一九九三年 吉川弘文館)  
 松尾剛次 「鎌倉新仏教と女人救済」(『仏教史学』第三七卷第二号 一九九四年)  
 松尾剛次 「説経節「さんせう太夫」と勸進興業」(『勸進と破戒の中世史』一九九五年 吉川弘文館) \*初出は一九九四年

- 松尾剛次『鎌倉新仏教の誕生』（一九九五年 講談社）
- 松尾剛次『新版 鎌倉新仏教の成立』（一九九八年 吉川弘文館）\*旧版は一九八八年刊行
- 松尾剛次「安国寺・利生塔再考」（『山形大学紀要（人文科学）』第十四卷第三号 二〇〇〇年）
- 松尾朱美「安倍晴明像の変遷―泣不動説話を中心に―」（『大阪青山短大国文』第十六号 一九九〇年）
- 松岡心平「演劇としての宗教―時宗（四条道場論）」（『宴の身体』二〇〇四年 岩波現代文庫 \*初出は一九八一年）
- 松崎憲三「廻り地蔵の研究」（『廻りのフォークロア』一九八五年 名著出版）
- 松崎憲三『地蔵と閻魔・奪衣婆』（二〇一三年 慶友社）
- 松島健『地蔵菩薩像』（一九八六年 至文堂）
- 松田陽志「五位説と道元禪師」（大本山永平寺大遠忌局文化事業専門部会出版委員会編『道元禪師研究論集』二〇〇二年 永平寺）
- 松原治郎『核家族時代』（一九六九年 NHKブックス）
- 松村寿巖「日蓮宗における十王信仰の受容について」（『印度学仏教学研究』第十九卷第二号 一九七一年）
- 松村寿巖「『十王讚歎鈔』と『十王讚嘆修善鈔』（『日蓮教学研究紀要』第二十号 一九九三年）
- 松本栄一「敦煌本十王経図巻考」（『国華』第六二二号 一九四四年）
- 松山善昭「近世東北における新仏教の伝播と教団形成」（日本宗教史研究会編『日本宗教史研究1』一九六五年）
- 真鍋広済「実睿の「地蔵菩薩靈驗記」の著作時期について」（『竜谷大学論集』第二七九号 一九二八年）
- 真鍋広済『地蔵説話の研究』（一九三二年 顕真学苑）
- 真鍋広済『地蔵巡礼』（一九三九年 森江書店）
- 真鍋広済『地蔵尊の研究』（一九四一年 富山房書店）
- 真鍋広済「西院河原地蔵和讃成立考」（『竜谷大学論集』第三五三号 一九五七年）
- 真鍋広済「三井寺実睿編集「地蔵菩薩靈驗記」再攷」（『龍谷大学論集』第三五二号 一九五六年）

- 真鍋広済 「『今昔物語』と『地蔵菩薩靈驗記』」(『文学・語学』第七号 一九五八年)
- 真鍋広済 『地蔵菩薩の研究』(一九六〇年 三密堂)
- 真鍋広済 『地蔵文化の研究』(発行年代不明 ガリ版刷・私架蔵)
- 丸山博正 「選択集について」(『大正大学研究紀要』第六十輯 一九七五年)
- 水上文義 「伝・良助親王撰『与願金剛地蔵菩薩秘記』小考」(菅原信海『神仏習合思想の展開』一九九六年 汲古書院)
- 三田全信 「鎌倉二位禅尼への消息と背後考」(『仏教文化研究』第十三号 一九六六年)
- 水上勉 『説経節を読む』(一九九九年 新潮社)
- 峰岸秀哉 「中世曹洞教団の地方伝播とその受容層」(『教化研修』第十七号 一九七四年)
- 蓑輪頭量 『中世初期南都戒律復興の研究』(一九九九年 法蔵館)
- 宮井義雄 『日本浄土教の成立』(一九七九年 成甲書房)
- 宮井義雄 『教行信証の成立とその真髓』(一九八八年 春秋社)
- 宮井義雄 『親鸞の大地 教行信証と古事記』(一九八八年 春秋社)
- 三浦雅彦 「鈴木正三における伝記研究と批判」(『鈴木正三研究序説』二〇一三年 花書院)
- 宮城洋一郎 「叡尊の文殊信仰」(『印度学仏教学研究』第三六卷第一号 一九八九年)
- 都九十九一 『地蔵行事の概要とその和讃集』(一九五五年)
- 宮崎圓遵 『初期真宗の研究』(一九七一年 永田文昌堂)
- 宮崎圓遵 『中世仏教と庶民生活 宮崎圓遵著作集第三卷』一九八七年 永田文昌堂)
- 宮島新一 「巨勢派論(下)」(『仏教芸術』第一六九号 一九八六年)
- 宮田登 「『水子霊』の復活」(『心なおし』はなぜはやる』一九九三年 小学館)
- 三山進 「伽藍神」(『鎌倉の禅宗美術』一九八二年 かまくら春秋社)

- 三吉朋十『武蔵野地蔵尊風土記』（全十二巻 一九六九〜七二年 仏教民俗学会）
- 三吉朋十『武蔵野の地蔵尊（都内編／埼玉県東部・川崎横浜編／埼玉編）』（一九七二／七五／七五年 有峰書店）
- 村上重良『慰霊と鎮魂』（一九七四年 岩波新書）
- 村上紀夫「近世都市京都の地蔵信仰」（二〇一五年二月二二日開催「お地蔵様サミット」配付史料）
- 村山修一『藤原定家』（一九六二年 吉川弘文館）
- 望月信成『地蔵菩薩』（一九八九年 学生社）
- 桃崎祐輔「律宗系文物からみた東国の律宗弘布の痕跡」（『戒律文化研究』第二号 二〇〇三年）
- 百地章「町会に対する地蔵像の市有地無償貸与の合憲性（最判平成4・11・16）」（『民商法雑誌』第一〇八号 一九九三年）
- 森新之介『撰関院政期思想史研究』（二〇一三年 思文閣）
- 森島康雄「平安京跡・旧二条城跡出土の石仏」（『史迹と美術』第六三巻第七号 一九九三年）
- 森栗茂一「水子供養の発生と現状」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第五七集 一九九四年）
- 森栗茂一『不思議谷の子供たち』（一九九五年 新人物往来社）
- 森末義彰「勝軍地蔵考」（『美術研究』第九一号 一九三九年）
- 門前町史編さん専門委員会編『新修門前町史 資料編2 総持寺』（二〇〇四年 門前町）
- 門前町史編さん専門委員会編『新修門前町史 通史編』（二〇〇五年 門前町）
- 八木聖弥「『壬生狂言』の成立について」（『文化史学』第三七号 一九八一年）
- 八木聖弥「足利尊氏と地蔵信仰」（『博物館学年報』第二八号 一九九六年）
- 矢島新「沼田市正覚寺蔵十王図と十三仏成立の問題」（『群馬県立女子大学紀要』第十号 一九九〇年）
- 安井広度『法然聖人門下の教学』（一九三八年 法蔵館）
- 安丸良夫「民俗の変容と葛藤」（『安丸良夫集4』二〇一三年 岩波書店 \*初出一九八六年）

- 柳田国男「百万と山姥」(『女性と民間伝承』、『柳田国男全集 第六卷』) \*初出一九二六〜二七年
- 柳田国男「酒」(『昭和大正史 世相篇』初出一九三一年↓講談社学術文庫)
- 築瀬一雄「『泣不動』の説話」(『説話文学研究』一九七四年 三弥井書店)
- 山崎千恵子「地藏盆あれこれ」(『子どもの文化』第三二卷第一〇号 二〇〇〇年)
- 山路興造「風流踊」(芸能史研究会編『日本芸能史4』一九八五年 法政大学出版社)
- 山路興造「京都府の盆行事」(文化庁文化財保護部『盆行事Ⅲ』一九九八年)
- 山崎誠「解題」阿部泰郎・山崎誠編『真福寺善本叢刊 第六卷』(二〇〇四年 臨川書店)
- 山本世紀「北関東における禅宗の展開」(池田英俊・大濱徹也・圭室文雄編著『日本人の宗教の歩み』大学教育社 一九八一年)
- 山本世紀『上野国における禅仏教の流入と展開』(二〇〇三年 刀水書房)
- 湯浅泰雄「神々と世界と英雄」箕泰彦・小澤富夫編『日本人の倫理思想』一九七〇年 東宣出版)
- 横井清『室町時代の一皇族の生涯』(二〇〇二年 講談社学術文庫) \*『看聞御記』(一九七九年 そしえて)の改版
- 横山秀哉『禅の建築』(一九六七年 彰国社)
- 吉田靖雄『日本古代の菩薩と民衆』(一九八八年 吉川弘文館)
- 吉原健二・和田勝『日本医療保険制度史』(二〇〇八年 東洋経済新報社)
- 吉田文夫「忍性の思想とその教学」(『日本仏教』第四号 一九五九年)
- 吉田雅男「とげぬき地藏の信仰調査」(『仏教と民俗』第二号 一九五八年)
- 頼富本宏『庶民のほとけ 観音・地藏・不動』(一九八四年 日本放送出版協会)
- 立正大学日蓮教学研究『日蓮教団全史・上』(一九六四年 平楽寺書店)
- 若林喜三郎編『加賀 能登の歴史』(一九七八年 講談社)
- 和歌森太郎『歴史研究と民俗学』(一九六九年 弘文堂)

- 和歌森太郎「地蔵信仰について」(桜井徳太郎編『地蔵信仰』一九八三年 雄山閣) \*初出は一九五一年
- 和島芳男『叡尊・忍性』(一九五九年 吉川弘文館)
- 和多秀乘「高野山の歴史と信仰」(松長有慶・他著『高野山』一九八四年 法蔵館)
- 和田有希子「無住道暁の鎌倉期臨濟禪」(『文芸研究』第一五三集 二〇〇二年)
- 和田有希子「鎌倉中期の臨濟禪―円爾と蘭溪のあいだ」(『宗教研究』第三三八号 二〇〇三年)
- 和田有希子「鎌倉初期の臨濟禪」(『仏教史学研究』第四九卷第一号 二〇〇六年)
- 渡邊一「泣不動縁起絵巻」(『美術研究』第三五号 一九三四年)
- 渡部隆生「地蔵研究とその経典」(『国訳一切経・印度撰述部大集部第五』一九七三年)
- 渡浩一「民間地蔵信仰の一考察(上・下)」(『仏教民俗研究』第四・五号 一九七七・八〇年)
- 渡浩一「中世地蔵説話集の編纂をめぐって」(『仏教文学』第七号 一九八三年)
- 渡浩一「中世地蔵説話概観」(『東洋大学大学院紀要』第二〇号 一九八四年)
- 渡浩一「十四卷本『三国因縁地蔵菩薩靈驗記』とその周辺」(『東洋大学大学院紀要』第二一号 一九八五年)
- 渡浩一「近世地蔵説話集と地蔵縁起―十四卷本『地蔵菩薩靈驗記』の場合―」(『武蔵野文学』第三三号 一九八五年)
- 渡浩一「生身地蔵の出現」(小松和彦他著『絵画の発見』平凡社 一九八六年)
- 渡浩一「地蔵の逆縁救済をめぐって―『地蔵菩薩靈驗記』巻七第五話を中心として―」(『説話文学研究』第二一号 一九八六年)
- 渡浩一「『地蔵利益集』の世界―貞享・元禄時代の民間地蔵信仰―」(『仏教民俗研究』第六号 一九八九年)
- 渡浩一「とげぬき地蔵の信仰と民俗」(瀬戸内寂聴・他監修『仏教行事歳時記 放生』一九八九年 第一法規出版)
- 渡浩一「『地蔵菩薩利生記』について」(『明治大学教養論集』第二四二号 一九九二年)
- 渡浩一「華嚴経 破地獄偈をめぐって」(説話・伝承学会『説話 救いとしての死』一九九四年 翰林書房)
- 渡浩一「空也堂蔵『空也上人絵詞伝』と『西院河原口伝』」(『明治大学教養論集』第三三九号 二〇〇一年)

- 渡浩一 「一四巻本『地藏菩薩靈驗記』解説」(榎本千賀・他編『一四巻本地蔵菩薩靈驗記(下)』二〇〇三年 三弥井書店)
- 渡浩一 「幼き亡者の世界」(林雅彦編『生と死の図像学』二〇〇三年 明治大学)
- 渡浩一 「西院河原口号伝絵」二種」(『明治大学教養論集』第三九二号 二〇〇五年)
- 渡浩一 「『西院河原地蔵和讃』の唱導」(『日本宗教文化史研究』第九卷第一号 二〇〇五年)
- 渡浩一 『お地藏さんの世界』(二〇一〇年 慶友社)

#### 他言語

- M.W. de Visser "The Bodhisattva ti-tsang(jizo) in China and Japan" 1914 Oesterheld
- La Fleur" Liquid Life, 1992 Princeton U.P. → 森下直貴・他訳『水子 へ中絶へをめぐる日本文化の底流』(二〇〇六年 青木書店)
- Helen Hardacre "Marketing the Menacing Fetus in Japan" 1997 California U.P.
- F.Wang-Toutain "Le Bodhisattva Ksitigarbha en Chine du V au X III Siècle" 1998 Presse l'École française d'Extreme-Orient
- Hank Glassman "The Face of Jizo : Image and Cult in Medieval Japanese Buddhism" 2012 Hawaii U.P.
- 金廷禧 『朝鮮時代地藏十王図研究』(一九九六年 一志社)
- 周樹佳 「地藏王」(『香港諸神』二〇〇九年 中華書局)

#### 参考 HP

- 森栗茂一 「関西の都市と地藏信仰」  
[http://morikuri.cocolog-nifty.com/achievement\\_of\\_20century/shinsai\\_jizou\\_community/02kansai\\_toshi\\_jizou\\_shinkou.doc](http://morikuri.cocolog-nifty.com/achievement_of_20century/shinsai_jizou_community/02kansai_toshi_jizou_shinkou.doc)
- 最終閲覧日：二〇一五年七月十五日
- 森栗『子育てコミュニティとしての地藏盆の現代民俗学的研究』(二〇〇三年 科学研究費報告書)にも同様の記述がある。

なわじゅん「東大寺知足院地藏会」

<http://pinbokejun.blog93.fc2.com/blog-entry-256.html>

最終閲覧日：二〇一五年七月十五日